

国際子ども図書館 の窓

子どもの本は
世界をつなぎ、
未来を拓く!

第 7 号
2007.3

表紙デザイン：熊谷 博人氏

<国際子ども図書館の2006年>



公開対談『『ゆめいろのパレットⅡ』の原画と絵本を語る』
講師：スズキコージ氏（左）、松本 猛氏（右）（1月10日） p.39



講演会「ドイツの子どもの本の歴史」
講師：吉原 高志氏（2月4日） p. 4, 40



講演会「児童文学に見る子ども像
—もじゃもじゃの系譜」
講師：本田 ^{ますこ}和子氏（4月22日） p. 4, 40



科学あそび
「いろいろな音を楽しもう～身近なもので楽器作り」
（7月29・30日） p.44



「旧帝国図書館建築100周年記念セミナー」講演会
講師：米山 勇氏（左）、坂本 勝比古氏（右）（9月30日） p.17



講演会「北欧へのいざないー北欧の子ども
の本と展示会の見どころ」
講師：福井 信子氏 （7月15日） p.40

講演会「ノルウェーの子どもの本の歴史」
講師：カーリン・ベアテ・ボル氏
（11月9日） p.41

国際子ども図書館の窓 第7号
＜目次＞



口絵 国際子ども図書館の2006年

はじめに	＝村山 隆雄	2
展示会「もじゃもじゃペーターとドイツの子どもの本」 ＝「もじゃもじゃペーターとドイツの子どもの本」展示班		3
上野の森に、いたずらっ子たちがやってきた －「もじゃもじゃペーターとドイツの子どもの本」展に寄せて－ ＝吉原 高志		6
展示会「北欧からのおくりもの－子どもの本のあゆみ」 ＝「北欧からのおくりもの」展示班		11
北欧の子どもの本－その豊かな世界	＝福井 信子	13
旧帝国図書館建築100周年記念行事	＝企画協力課企画広報係	17
イングラム・コレクションで学ぶ、初期のイギリス絵本 ＝吉田 新一		19
遠くから眺めるハンガリーの児童図書事情	＝深谷ベルタ	26
セミオーダーで承ります－子ども向け見学－	＝児童サービス課	32
絵本ギャラリー「江戸絵本とジャポニズム」 「子どもの本 イメージの伝承」提供開始 ＝企画協力課企画広報係		35
平成18年度「児童文学連続講座－当館所蔵資料を使って」 総合テーマ「絵本の愉しみ－イギリス絵本の伝統に学ぶ－」 を終了して	＝企画協力課協力係	36
活動報告		38
数字で見る！国際子ども図書館		47
これから		52
利用案内		53

はじめに



国際子ども図書館の建物にとって、平成18年度は画期的な年でした。旧帝国図書館が明治39（1906）年に創建されてからちょうど100年を迎えたのです。旧帝国図書館は国立国会図書館の源流の一つです。もう一つの源流は旧帝国議会の貴族院図書館と衆議院図書館です。国立国会図書館は、これを記念して「旧帝国図書館建築100周年記念展示会」を国際子ども図書館と東京本館で開催しました。あわせて、関連行事として、9月30日に、見学ツアーと講演会から成る「記念セミナー」を国際子ども図書館で開催いたしました。

旧帝国図書館建築史をたどりますと、明治時代には日露戦争があり、当初計画の四分の一しかできませんでした。大正時代には関東大震災がありました。昭和4年に増築されますが、続く戦争の影響もあり、結局は全体計画の三分之一ができたにすぎません。平成に入り、少子化や子どもの読書離れを背景に、子どもの本や読書に関わる実に応用な方々のお力添えと、明治の建築遺産を次の時代に継承させるのだという熱意と技術の結晶により、国際子ども図書館に生まれ変わりました。後世、国際子ども図書館は20世紀の大人たちから子どもたちへの最良の贈り物と評価されることと確信していますが、次の50年、100年を考えますと、施設的には、さらなる整備が必要となっています。

昨年、私はこの欄で、「国際子ども図書館は、「桃、栗」の草創期を過ぎ、早、「柿」が実をつける頃に入りつつあります。次の「梅」の時代に備えなければなりません」と申しました。平成18年度は、一昨年提出された「国際子ども図書館の図書館奉仕に関する調査会答申」に基づき、施設の拡充も視野に入れた「国際子ども図書館拡充基本計画」を策定しました。平成17年度には、国際子ども図書館に隣接する宿舍跡地を整地しました。平成18年度と19年度の2か年で、敷地と建物の調査を実施いたします。書庫の耐用年数と資料の増加等を勘案しながら、怠りのない準備を進めてまいります。

一方で、運営の効率化にも対応しなければなりません。施設の拡充という「梅の花」を咲かせるには、厳しい環境に耐えるだけでなく、日々の活動を通して、国際子ども図書館が社会的な投資に値する児童書のナショナル・センターであり、子どもと本の出会いのきっかけを作るかけがえのない図書館であることを自ら証明し続ける必要があります。

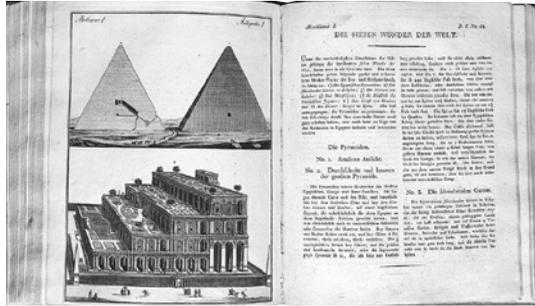
この1年の私たちの活動を『国際子ども図書館の窓』に込めました。国際子ども図書館の活動が、皆様の評価に耐えるものであることを願いつつ、第7号をお届けいたします。

2007年3月

国立国会図書館国際子ども図書館長 村山 隆雄

もの本の歴史と人と作品を紹介しました。

ホフマン以前では、コメニウスやベルトゥーフが子ども向けの美しい絵入りの教科書を生み出した啓蒙主義の時代から、日本でも馴染み深いグリムの昔話やハウフの童話などのロマン主義の時代までを、ホフマン



ベルトゥーフ『子どものための絵本』

の時代では、『もじゃもじゃペーター』以降のホフマンの作品に加え、当時職業画家として多くの美しい挿画を描いたポッツィや漫画のルーツと言われるブッシュ等を、ホフマン以後では、クライドルフやオルファース、ケストナー、エンデ等、美しい絵本から優れた児童文学までを幅広く紹介しました。

コーナー展示スペース

「ドイツとドイツ語圏の国々」では、ドイツ語圏の国々の紹介とドイツの文学博物館を紹介し、「ペーター誕生期の日本の子ども」では、『もじゃもじゃペーター』が生まれた頃の、日本の寺子屋の様子などを紹介しました。

3. 展示会関連イベント

関連行事として、2回の講演会を行いました。

①平成18年2月4日(土)、監修者吉原高志氏が「ドイツの子どもの本の歴史」と題し、17世紀ヨーロッパにおける「子どもの発見」から、ファンタジーの復権に至るまでのドイツ語圏における子どもの本の流れを概観しました。また、一見教育的でありながら子どもたちをひきつけてやまない『もじゃもじゃペーター』の成立の背景について講演されました。

②平成18年4月22日(土)、前お茶の水女子大学学長本田和子(ますこ)氏が「児童文学に見る子ども像—もじゃもじゃの系譜」と題し、ドイツ語圏の児童文学に登場する主人公たちの中から、『ハイジ』と『モモ』を選び、「もじゃもじゃ」が象徴するもの、現代日本における「もじゃもじゃ」的子どもの不在について話されました。

*講演会の詳細については、国際子ども図書館ホームページ (<http://www.kodomo.go.jp/>) - 「展示会・イベント」 - 「講演会等の記録」を参照ください。

4. アンケートの結果

会期中、会場でアンケートを実施し、389名(女性287名、男性96名、無記入6名)から回答がありました。

回答者の年齢層は、小学生12.6%、中学生・高校生5.7%、大学生11.1%、20代

17.0%、30代18.8%、40代12.1%、50代9.5%、60代8.7%、70代以上3.3%、無記入1.3%と、20~30代を中心とした幅広いものでした。

また、回答者のお住まいは、東京都内が42.9%、東京都を除く関東が39.6%と、多くは関東近県でしたが、北海道から沖縄まで全国各地および海外にもわたっていました。

展示会の開催を知ったきっかけは、上野公園内に設置された案内掲示板が30.1%と最も多く、次いで館内案内が22.6%。一方、ポスター・チラシ14.1%、友人・知人12.1%、ホームページ6.2%、新聞・雑誌4.6%等、各種メディアや口コミなどによったという方がこれまでよりも多いように見受けられました。

展示会の印象については概ね好評でした。一方、期待したほどではなかったという声も3.6%ありました。

以下に、ご意見・ご要望の一部をご紹介します。

- ・「もじゃもじゃペーター」を初めて知りました。すばらしい作家とただ驚嘆しました。(男性/70代)
- ・絵がきれい。話がおもしろい。(女性/小学1~3年生)
- ・もじゃもじゃペーターがすごく読みたくなった。(女性/小学4~6年生)
- ・一冊の絵本から影響を受けて、いろいろな絵本やお話が生まれたことに驚きました。(女性/40代)
- ・国によって表現がさまざまなペーターが見られた。(女性/50代)
- ・別々に出会って楽しんでいる絵本のつながりを知り、おもしろかった。(女性/40代)
- ・もじゃもじゃペーターは子どもだけでなく大人も考えさせられる本だから読みつがれていき、世界でも有名になっていったのかなと思った。本当に楽しかったです!!(女性/高校生)
- ・原画や手に触れられる作品があると良い。(女性/40代)
- ・子どもたちと一緒に読んだ本を何冊も思い出し、とてもなつかしく思いました。(女性/60代)
- ・図録の販売があつたら良かったと思います。(男性/20代、ほか多数)
- ・もっと宣伝したほうが良いと思います。(男性/30代、ほか多数)
- ・ひとつの文学作品が時代ごとに姿を変えて人々に読み継がれていく過程を並べてみると、川が枝分かれしながら流れていくようで、おもしろいと感じた。(男性/大学生)

今回の展示会をきっかけに、これからも『もじゃもじゃペーター』をはじめ、数々の魅力的なドイツの子どもの本の世界に親しんでいただけたらと思います。

(「もじゃもじゃペーターとドイツの子どもの本」展示班)

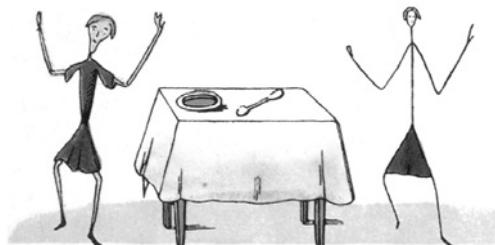
上野の森に、いたずらっ子たちがやってきた —「もじゃもじゃペーターとドイツの子どもの本」展に寄せて—

吉原 高志

1 「もじゃもじゃペーター」って、何者？

国際子ども図書館が所蔵するハインリヒ・ホフマンの絵本『もじゃもじゃペーター』とホフマンのそのほかの作品、そして『もじゃもじゃペーター』の現在に至るまでのパロディなどを中心に「もじゃもじゃペーターとドイツの子どもの本」という展示会が開催されました。

『もじゃもじゃペーター』は、1845年にドイツで出版された絵本で、この絵本の登場人物のひとりが、「もじゃもじゃペーター」と呼ばれる男の子です。ホフマンは、1844年のクリスマスに、三歳の息子のために本を買いに行きますが、その年齢にふさわしい本を見つけることができません。自伝では、なにか人を教育するような啓蒙主義的な本ばかりだ、と書いています。そこで、ホフマンは、自分で絵を描き、その絵に韻文を付け、一冊の絵本を作ります。髪の毛は伸ばし放題、爪も切らせない、大人の手におえないペーター、好き嫌いを言って親を困らせ、しまいにはやせ細って死んでしまうカスパール（右図）、マッチいたずらをして焼け死んでしまうパオリンヒェン（下図）、嵐の中を傘を持って外へ出て行き、風に吹き



スープぎらいのカスパール



マッチいたずらのパオリンヒェン

飛ばされ、行方不明になってしまうローベルトなど、どの登場人物たちも、いたずらっ子で、結局は、そのいたずらの報いを受けています。この絵本は一見「親の言うことを聞かず、いたずらをする」という教育的意図を持った絵本に見えます。けれども、この絵本が、単に教育的な絵本であったとしたら、なぜ子どもたちに今なお読み継がれているのでしょうか。

1845年といえば、日本ではまだ江戸時代。この展示会には『もじゃもじゃペーター』と同時期の日本の子どもの本も展示しました。けれども、こういった江戸時代の子どもの本を、いま私たちは普段、手にして読みません。ところが、『もじゃもじゃペーター』は、今でもドイツの本屋で売られ、子どもたちに読まれています。絵本とともに『もじゃもじゃペーター』の登場人物たちの切手、缶バッジ、錫の人形も展示しましたが、これらは、『もじゃもじゃペーター』が、ドイツで今日なお親しまれている証です。また、フランクフルトの一番の中心には、『もじゃもじゃペーター』の登場人物たちを組み合わせた噴水があります。マッチいらずらのパオリンヒェンが焼け死んでしまうと、二匹の猫がかたわらで泣く場面がありますが、噴水では、その猫の目から水が流れています。『もじゃもじゃペーター』は、フランクフルトのシンボルと言ってもいいでしょう。昔話の最後は「今でもやっぱり生きています」という文句で終わりますが、『もじゃもじゃペーター』は、ドイツで、今でもやっぱり生き続けています。

2 子どもの本の歴史の中で『もじゃもじゃペーター』を考える

『もじゃもじゃペーター』を、ドイツの子どもの本の流れの中に置いてみることで、その独自性が見えてくるだろう、というのが今回の展示会の基本的な考えでした。

ゲーテが『詩と真実』の中で、子どものころの読書体験を振り返り、「ただひとつの子ども向けの本」と呼んだアーモス・コメニウスの『世界図絵』（1658）から現代までのドイツの子どもの本の歴史が概観できるようなコーナーを設けました。最近では、ドイツの子どもの本の歴史は、13、14世紀にまでさかのぼって論じられるようになっていますが、本来の意味で「子どもの本」といえるものが出るのは17世紀になってからです。『世界図絵』は絵本というよりも、ラテン語とドイツ語を対照した一種の教科書ですが、150枚もの木版画が添えられ、大いに子どもたちを喜ばせました。そのことによってこの本は、「知識の本」の始まりであっただけでなく、子どもの本の源流ともなりました。

18世紀は、啓蒙主義の時代です。このころの子どもの本は、知的、道徳的に未成熟な子どもを理性的な大人にすることが求められた時代ですから、教育が重視され、コメニウスの流れを継いで、知識の本が数多く出されました。代表的なものが、パーゼドフの『初等教育』（1770～74）で、今回展示したベルトウーフの『子どものための絵本』も、そのうちのひとつです。

啓蒙主義の時代は、理性的、合理的思考が求められましたから、「楽しみ」という要素はわきのにけられ、昔話、童謡、民謡といった民間伝承的な文芸は、荒唐無稽、非合理的なものと思われ、軽く扱われていました。

フランスの歴史学者、フィリップ・アリエスによれば、「小さな大人」と考えられていた子どもが大人と区別され始めたのは、フランスでは17世紀以降だそうです。

が、ドイツで「子ども期」が意識されるにはさらに遅れて18世紀になってからです。そして「子ども期」が確立するのは19世紀に入ってからのことです。インゲボルク・ヴェーバー＝ケラーマンによると、「子ども部屋」が、寝るための部屋から遊びの空間へと変わっていき、「子ども部屋」が生まれ、おもちゃが大量に増えていったのも、19世紀になってからです。このころになってようやく子どもを独立した存在と認め、子どもの欲求や興味などに大いに関心を払うようになります。

それが18世紀末から19世紀前半にかけて、ドイツではロマン派の時代になります。前期ロマン派の詩人、ノヴァーリスが「文学の最高の規範はメルヘンである」と言ったように、昔話は文学の最高形式として重んじられるようになりました。この時代には、多くの作家たちがすぐれたメルヘンをたくさん書いています。また子どもに向けた本も数多く出されました。E. T. A. ホフマンの『くるみ割り人形とねずみの王様』（1816）やヴィルヘルム・ハウフの作品など、今でも子どもの本として生き残っています。



『少年の魔法の角笛』

ん童謡などは意味のない言い回しや言葉遊びにすぎないとして蔑まれていました。啓蒙主義の時代に良いとされた童謡は、生活規範や徳育を教えるような教育的な歌でした。詩の一番の役割は、内容を伝えることで、リズム、調子、響きなどは副次的なものでした。それに対して、『少年の魔法の角笛』では、特にブレンターノが、リズム、調子、響きといった「詩」の言葉を大切にし、言葉遊び、猥雑な表現、猥褻な言葉も排除することなく、「詩」としての民謡の豊かさを生き返らせるよう努めました。

ロマン派が「詩」としての伝承童謡を発見したことによって、教育の対象である

ロマン派の残した大きな業績として、『グリムの昔話集』とアヒム・フォン・アルニムとクレメンス・ブレンターノの収集、編集した『少年の魔法の角笛』があります。『グリムの昔話集』のほうは、「ヘンゼルとグレーテル」、「赤ずきん」、「白雪姫」など、多くの人がその中に収録された話を読んだことがあるでしょう。一方、『少年の魔法の角笛』は、名前は知ってはいても、読んだ人はあまりいないでしょう。この民謡集の付録として140編ほどの童謡がまとめて収められました。伝承童謡の収集、出版はこれ以前にも行われていましたが、これほど多くの、そして多様な童謡を収録したものは『少年の魔法の角笛』が最初です。先にも書いたように、啓蒙主義の時代には民謡や昔話などは下らぬものとして軽く見られていました。もちろん

学校に通う子どもたちよりもさらに幼い子どもたちが、子どもの文学の対象として、また受け手として登場することになりました。フランクフルト大学の児童図書研究所の所長、ハンス・ハイノ・エーバースは、「子どもの本の歴史から見て、『少年の魔法の角笛』は、童謡のあり方をまったく変えてしまった」と書いていますが、子どもの本のあり方そのものも変えたとも言えるでしょう。この童謡集は、啓蒙主義から脱する流れの先頭に立つと同時に、グリム兄弟へと引き継がれ『グリムの昔話集』の生みの親ともなりました。

『ヨーロッパの子どもの本』の著者、ベッティーナ・ヒューリマンは、『少年の魔法の角笛』などに見られる、おかしみのあふれたバラード風の童謡は「ようやく十九世紀の中ごろ以後、ハインリッヒ・ホフマン博士、ヴィルヘルム・ブッシュ、ポツィ伯爵、クリスチャン・モルゲンシュテルンなどによって、ふたたびとりあげられた」と書いています。ハインリッヒ・ホフマンの『もじゃもじゃペーター』のナンセンスなおかしみの元を探っていくと『少年の魔法の角笛』に行き当たります。

そして、『もじゃもじゃペーター』は、ナンセンスな絵と、それに添えられたナンセンスな詩によって、ドイツの子どもの絵本の新しい扉を開いていきます。

3 「いたずらっ子」の系譜

『もじゃもじゃペーター』は、数多くのパロディや模倣作を生み出しています。パロディが作られる条件は、元になる作品が、ある文化圏で共有された作品となっていることです。『もじゃもじゃペーター』は、出版されるとまもなくパロディが出ていますし、カール・フリードリヒ・ヴェヒターの『アンチ・もじゃもじゃペーター』(1970)など今でも多くのパロディを生み出しています。ことは、ドイツ、ヨーロッパに限らず日本でもパロディや模倣作が出されています。今回展示されたパロディには、これまで、研究書などでしか目にするのができなかったものも数多く含まれています。

また、『もじゃもじゃペーター』は、「いたずらっ子」の宝庫として、その後の子どもの本の世界に、多くの「いたずらっ子」を生み出しています。今回の展示会では、『もじゃもじゃペーター』がその後の子どもの本に与えた影響について、パロディだけではなく、「いたずらっ子」の系譜という視点からも見えてくるように工夫しました。『もじゃもじゃペーター』に登場する子どもたちは、大人の手におえない「いたずらっ子」ばかりです。親の言うことを聞かない子どもたちは、しまいには痛い目にあっています。そういう意味では、悪いことをすれば報いを受ける、という教訓を含んでいて、確かに教育の本、しつけの本と言えるでしょう。けれども、『もじゃもじゃペーター』が、今なお子どもたちに読み継がれている一番の理由が、「教育」や「しつけ」にあるとは思えません。

子どもたちは、このいたずらっ子たちに共感し、自分たちの仲間や自分自身を見

つけているにちがひありません。嵐の中、傘をさして表に出て行くローベルト（右図）に、子どもたちは、台風が来る前に胸をときめかせ、おののかせた自分を重ね合わせないでしょうか。マッチいたずらをするパオリンヒェンに、初めてマッチをすった時の不安と達成感を思い起こさない子どもがいるでしょうか。ローベルトやパオリンヒェンは、子どもたちの探究心や好奇心を、自分たちに代わって満たしてくれます。危険でない挑戦に子どもたちは心を惹かれません。子どもたちは、いたずらが大好きです。大人たちから見れば、下らないことに夢中になって、時には痛目にもあうでしょう。でもそのようにして、子どもたちは学んでいくのです。その原型のような子ども像が、『もじゃもじゃペーター』には描かれています。そのような「いたずらっ子」たちが、その後の子どもの本にはたくさん登場してきます。『もじゃもじゃペーター』の20年後、ヴィルヘルム・ブッシュの『マックスとモーリッツ』がすぐ後に続きました。ヨハンナ・シュピーリの自然児「ハイジ」、アストリッド・リンドグレーンの規格はずれの「長くつ下のピッジ」、モーリス・センダックの親に逆らってばかりいる「ピエール」など、いくらでも「もじゃもじゃペーター」の子どもや孫たちを見つけ出すことができます。ドイツでは、ミヒヤエル・エンデの髪の毛がぼうぼうの「モモ」が、名乗り出ることでしょう。



風にさらわれたローベルト

大人たちが敷いたレールや規則から逸脱し、子どものみが持ちうる生命力や好奇心を思う存分発揮する登場人物に、子どもの読者たちが共感を持たないわけがありません。子どもの本に登場する、そういった子どもたちを「いたずらっ子」の系譜としてとらえ、展示してみました。

フランクフルト大学の児童図書研究所の前所長であるクラウス・ドーデラーは、『もじゃもじゃペーター』には、シュールリアリズムに通じるものがあり、その現実を超えたおかしみに子どもたちは魅力を感じている、と書いています。展示されたハインリヒ・ホフマンの他の作品や、最初の手書きの「もじゃもじゃペーター」や『もじゃもじゃペーター』のさまざまな版などから、このような魅力も感じ取れたかと思います。

今回の展示会を、多くの子どもたちが目を輝かせて見てくれたとの報告をいただきましたが、それはとりもなおさず、『もじゃもじゃペーター』の持つ魅力が、現代のいたずらっ子たちをも引き付けたからにほかならないからだ、と思います。

（よしはら たかし 関東学院大学教授）

展示会

「北欧からのおくりもの一子どもの本のあゆみ」

1 はじめに

国際子ども図書館では2006年7月15日(土)から2007年1月28日(日)まで、3階「本のミュージアム」において北欧の子どもの本320点を紹介する展示会を開催した。デンマーク、スウェーデン、ノルウェー、フィンランド、アイスランド、フェロー諸島の国や地域がある北欧では、美しい自然と厳しい環境のなかで昔話や北欧神話などが受け継がれるとともに、数多くの優れた児童文学者や画家を輩出している。当館では2000年末に「絵本が映し出すオーロラ～北欧の作家と絵本展～」を開催しているが、この展示会は部分開館時で小規模であったため、再度北欧地域の本格的な展示会を望む声が寄せられていた。その後、北欧の基本児童書の充実・整備の結果、北欧諸言語資料の所蔵は現在2,000冊を超えるまでになり、本展示会の実現となった。

北欧地域の代表的な子どもの本を一堂に会して紹介するのは国内では初めての試みであった。企画にあたっては福井信子氏(東海大学助教授)に展示会全体の監修を、菱木晃子(あきらこ)氏(翻訳家)にはスウェーデン語の資料、稲垣美晴氏(翻訳家)にはフィンランド語の資料についてそれぞれ監修とご協力をお願いした。

2 展示の構成と会場配置

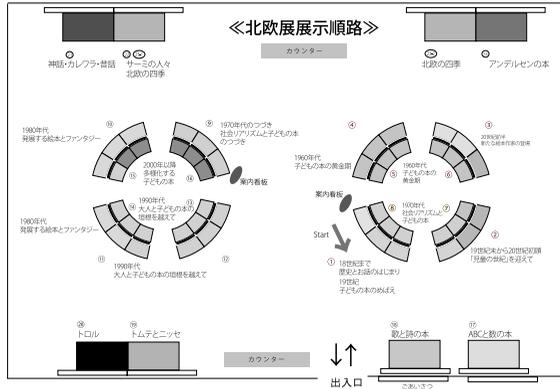
展示塔と各コーナーの展示構成は下図の通りである。展示塔では北欧児童文学の黎明期から現代までを9の時代に分け、それぞれの時代ごとに時代背景の説明、代表的な作家・画家とその作品を国ごとに展示した。

左右の塔入口ではスウェーデンを代表する絵本作家E.バスコフの『もりのこびとたち』に登場する妖精の案内看板が入場者を出迎えた。

<18世紀まで 歴史とお話のはじまり> のちの子どもの本に繋がるアイスランド

の「北欧神話」とデンマークの「サクソ」を紹介した。

<19世紀 子どもの本のめばえ> デンマークのアンデルセン童話を始めとしてノルウェーの昔話集、フィンランドの民族叙事詩「カレワラ」やフィンランドの童話の父Z.トペリウスを紹介した。



<19世紀末から20世紀初頭 「児童の世紀」を迎えて> スウェーデンの作家・画家が活躍した時代で、同国の最初の絵本とされるJ. ニューストレムの『子ども部屋の本』やO. アーデルボリの絵本、C. ラーションの絵、S. ラーゲルレーヴの『ニルス・ホルゲションのスウェーデンをめぐるふしぎな旅』などを紹介した。

<20世紀前半 新たな絵本作家の登場> スウェーデンのE. ベスコフの数々の絵本、やがてデンマークに登場したE. マティーセンやA. オンガマンによる斬新なデザインの絵本など代表的な作品を紹介した。

<1960年代 子どもの本の黄金期> 経済的にも繁栄したこの時期を代表する作家として、デンマークのI. S. オルセン、スウェーデンのA. リンドグレーン、ノルウェーのA. プリヨイセン、T. エグネル、A. -C. ヴェストリ、フィンランドのT. ヤンソンなどを紹介した。

<1970年代 社会リアリズムと子どもの本> 社会問題や子どもの心理を扱った作品が書かれたこの時期の代表的な作品のほか、障害について理解を促す本や幼児向けの絵本シリーズを紹介した。

<1980年代 発展する絵本とファンタジー> リアリズムからの反動でファンタジーが復活した時代で、スウェーデンのL. アンデションの「マーヤ」シリーズやフィンランドのM. クナナスの「サンタクローズ」の絵本など色彩豊かな作品を紹介した。

<1990年代 大人と子どもの本の垣根を越えて> 児童と大人の文学の両方を手がける作家が現れ、読み物も絵本も充実した時代で、各国の代表的な作家・画家の作品を紹介した。

<2000年以降 多様化する子どもの本> 子どもの本研究所を中心とした活動が各国で盛んに行われる今日、内外から注目されている現代北欧の作家・画家の作品を紹介した。

会場の四隅に設けた特別コーナーでは ABC と数の本・歌と詩の本／トムテとニッセ・トロール／神話・カレワラ・昔話／サーミの人々・北欧の四季／アンデルセンの本をテーマごとに展示し、伝統や行事における北欧の共通性ならびに地域の特色を味わうことができる構成とした。

会期中61,213人（一日あたり平均403人）もの入場者があった。アンケートでは時代背景と作家を通して、子どもの本のあゆみがわかった、歌と詩の本やABCと数の本などテーマ別の展示が面白かった、などのご意見をいただいた。また図録は展示した全資料のあらすじや解説、国地域を比較一覧した年表、北欧児童文学にまつわるコラム、作家紹介など北欧各地域の時代的な背景や歴史的な流れを概観する資料として好評であった。*会期中行った講演会とギャラリートークについては活動報告の40～42ページをご覧ください。

（「北欧からのおくりもの」展示班）

北欧の子どもの本—その豊かな世界

福井 信子

北欧には優れた子どもの本が数多く存在する。本展示会を企画するにあたり、北欧の自然や歴史、言語や文化などいろいろな角度から子どもの本と向き合い、あらたな発見や再確認をすることができた。本稿ではこうした経緯を中心にまとめてみたい。

北欧という地域

北欧とは、デンマーク・スウェーデン・ノルウェーのスカンジナビア3国のほか、フィンランドとアイスランドを加えるのが一般的である。最近の統計によると北欧全体で約2,470万、そのうちデンマークに541万、スウェーデンに908万、ノルウェーに464万、フィンランドに526万、アイスランドに30万の人々が暮らしている。そして、どの国もそれぞれの言語を持っている。最も人口の少ないアイスランドは「北欧神話」が誕生した歴史ある国でもある。北欧神話は中世のアイスランドで「エグダ」に書き記されることによって現代にまで伝えられており、北欧の子どもの本の土壌には、こうした北欧神話



アイスランドの自然

のお話の世界が背景にあると考えられる。

展示会の期間中に、原書を展示したアイスランドの絵本が2冊日本で翻訳出版されるといううれしい出来事があった。そのうち1冊はムグ

ルという愛称を持つ著名な画家グズムンドゥル・トルステインソン（1891-1924）による *Sagan af Dimmalimm*（邦訳：『デンマリのおはなし』 はじあきこやく 瑞雲舎 2006）という本である。画家の死後1942年にロンドンで出版された美しい水彩画のこの絵本は、アイスランドの子どもの本の古典となっている。

本展示会では、この他に、日本ではなじみの少ないフェロー諸島を1地域として扱い、フェロー諸島の子どもの本を紹介した。現在はデンマーク自治領である人口4万人のこの地域は、フェロー語という独自の言語を持っている。19世紀に正書法が確立し、ジョールス兄弟などの精神的な指導者も現われ、自然や風土に根ざした子どもの本が生み出されるようになった。展示で紹介した『夕暮れに』は、1948年にはじめて出版された挿絵入りの大型本で、フェロー諸島の歌やお話を集めた古典的な作品といえる。かつては夕暮れになるとおばあさんの周りに子どもたちが集

まり歌やお話に耳を傾けたという。書名はそのような情景に由来する。

展示では、このほかにも、スカンジナビア半島やフィンランドの北部に住むサーミ人を描いた本や、デンマーク自治領であるグリーンランドを題材にした絵本である『マスとミラリク』（スヴェン・オットー作・絵）、『ぼくのウロ！ ぼくのウロ！』（エーリク・ヨト・ニルセン作・絵）、『少年と山の精』（ベント・ハラール作）など珍しい地域の本を紹介した。

北欧各国の歴史と子どもの本

北欧各国の歴史的な関係を見ると、デンマークとノルウェーは1380年から1814年まで連合しており、スウェーデンとフィンランドは1150年から1809年まで支配関係にあった。9世紀にノルウェーにより植民されたアイスランド、および11世紀にノルウェーの支配下に入ったフェロー諸島は、ともにノルウェーに付随して1380年以降デンマークの統治を受けることとなった。

本展示会では、こうした相互の関係を考慮しながら、各国における歴史とお話のはじまりに着目し、その一例としてデンマークを取り上げた。古い王室を有するデンマークは、北海帝国、ヴァルデマー大王による国家統一といった歴史を誇っており、その輝かしい過去を13世紀初頭にサクソが『デンマーク人の事績』としてまとめた。この「サクソ」は一般



「北欧からのおくりもの」展示会場

としての道歩んでいる。児童文学に関しても20世紀初頭のエルサ・ベスコフの登場、またその後のアストリッド・リンドグレーンの出現により、第二次世界大戦後から現在にいたるまで北欧で指導的立場に立っている。1967年には早くも子どもの本研究所が設立され、1983年からはストックホルム大学に児童文学の講座が設けられている。活発な出版および広報活動により、スウェーデンは北欧の子どもの本を世界に知らせる窓口であり、イニシアティブをとる国として重要な存在である。

ノルウェーとフィンランドはともに20世紀に独立を果たした国であり、言語の系統は違うにせよ、それぞれ自国語の確立に力を注ぐなど、民族主義の目覚めは両国に共通している。1814年からスウェーデンの支配下にあったノルウェーは1905年に独立し、1809年からロシアの大公国となっていたフィンランドは1917年に独立した。

に子どもの本に分類されるものではないが、数々のお話の宝庫といえることから「北欧神話」と並ぶ存在と位置付けた。

スウェーデンは、16世紀のグスタヴ・ヴァーサ王以来北欧の大国と

19世紀の民族主義・ロマン主義の動きの中で、ノルウェーではアスピョルンセンとモーにより昔話集が出版され、フィンランドでは1835年に民族叙事詩『カレワラ』が出版されている。

アイスランドとフェロー諸島は大西洋の孤島であるため、同じノルド語であっても言語は古い形を残しており、他の北欧の国々とは異なった趣を呈している。

各国の児童文学史

北欧全体の子どもの本の歴史を辿る過程で、各国で出版された児童文学史のほか、スヴェン・ロッセルが編集しアメリカのネブラスカ大学出版会から出版されている「北欧の文学史シリーズ」を参照した。デンマーク編（1992）、ノルウェー編（1993）、スウェーデン編（1996）、フィンランド編（1998）の巻は既に刊行されていたものの、アイスランド編が出たのは2006年であったため、今回は残念ながら活用できなかった。どの巻も1つの章が児童文学史に当てられており、簡潔ながら有益であった。ただ、参照した4巻は90年代初頭で記述が終わっているため、現代の状況を知るには十分ではない。

フィンランドにはフィンランド語で書く作家とスウェーデン語で書く作家が存在するが、その事情が文学史の記述にも表れている。たとえばスウェーデンの巻ではマリア・ニコライエヴァが、フィンランドのスウェーデン語作家としてトペリウスやトーヴェ・ヤンソン、サンドマン・リリウスにも言及している。同様にフィンランドの巻ではマイヤ・レヒトネンが、トペリウスやフィンランド化運動に頁を割いているほか、バイリンガルの作家、スウェーデン語で書くフィンランド人作家を取り上げている。

ノルウェーでは、評論家ソニア・ハーゲマン（1898–1983）が、1965年から1974年にかけて出版した『ノルウェーの児童文学』3巻がノルウェーの児童文学研究の基礎となっている。ハーゲマンは第1巻を論文として大学に提出したが、これはアカデミックな場に児童文学を持ち出すことにより、子どもの本の地位を向上させた。また25年間にわたって新聞で子どもの本の書評を行い、大きな影響を及ぼした。しかし、子どもに人生の指針を与えるような真面目な作品を高く評価し、人気のあった少女小説などの娯楽的なものは認めないという厳しい姿勢であったため、作家や出版者を多少とも萎縮させることとなった。現代ではハーゲマンの基礎のうえに、娯楽的な作品も正当に評価する新しい『ノルウェー児童文学史』が3名の共著によりまとめられている。1997年に出版された後、2006年に改訂版が出され、ノルウェーの子どもの本についての適切な概説書となっている。著者の一人は、11月に開催された本展示会の講演者で「ノルウェー子どもの本研究所」所長であるカーリン・ベアテ・ボル氏である。

北欧各国における「子どもの本」の表記

「北欧からのおくりもの」と題した本展示会では、副題を「子どもの本のあゆみ」とし、解説でも「子どもの本」という言葉を多用している。北欧では、実際に「子どもの本」をどのように表記しているのだろうか。

たとえばデンマーク語では *børnebøger* (子どもの本) という言葉があるが、これに対し *ungdomsbøger* (若者の本) という言葉があり、*børn* (子どもたち) と *ungdom* (若者) が区別されている。両者を併せて *børne- og ungdomsbøger* と表記されることもある。小さな子どもの絵本から若者の読み物まで含めて全般的に簡潔に表現したいときには、前者の *børnebøger* (ノルウェー語で *barnebøker*、スウェーデン語で *barnböcker*) という言葉で代表させるのが北欧での慣用である。本展示会における「子どもの本」は、これと同様、広い意味を持たせて使用しており、色鮮やかな絵本から、哲学の歴史をわかりやすく語り日本でも愛読されたヨースタイン・ゴルデルの『ソフィーの世界』のような読み物までを包括している。

デンマークでは *børnebøger* という言い方のほかに、*børnelitteratur* (児童文学) と固く表現されることが比較的多いように思われる。各国に設立されている「子どもの本研究所」の名称を見ると、スウェーデンでは *Svenska barnboksintitutet*、ノルウェーでは *Norsk barnebokinstittutt* であるのに対し、デンマークでは *Center for Børnelitteratur* と呼ばれている。

子どもの本の歴史を扱った本の書名を見比べても同じことが指摘できる。スウェーデンのエーヴァ・フォン・スヴェイグバルクは1965年に『スウェーデンの子どもの本 1750-1950』(*Barnboken i Sverige 1750-1950*) を発表し、イエーテ・クリングバリは1991年に『ためになり喜びとなるよう スウェーデンの子どもの本の400年』(*Til gagn och nöje. Svensk barnbok under 400 år*) という題で本を書いている。デンマークではトーベン・ヴァインライクの2006年の著作に『児童文学の歴史—デンマークの児童文学の400年』(*Historien om børnelitteratur — Dansk børnelitteratur gennem 400 år*) という題が付けられている。ノルウェーでは、前述のソニア・ハーゲマンの3巻の著作『ノルウェーの児童文学』(*Barnelitteratur i Norge*) が古典的な「児童文学史」となっている。

おわりに

本展示会は北欧に豊かな子どもの本の世界が存在することと、北欧の多様性を伝える良い機会であった。展示した資料以外にも魅力的な本が多数あり、現在も次々と出版されている。北欧各国が有する歴史と、その中で育まれてきた子どもの本に対する理解は、こうした本を生み出すエネルギーの源になっているのではなかろうか。

(ふくい のぶこ 東海大学助教授)

旧帝国図書館建築100周年記念行事

上野公園の北側、東京芸術大学や東京国立博物館などに囲まれて建つ国立国会図書館国際子ども図書館。正面から見るとルネサンス様式の大変重厚な雰囲気を出しています。明治39（1906）年に「帝国図書館」として建てられたこの建物は、明治、大正、昭和、平成と100年の時を経て、子どもから大人まで、全ての年代の方が利用できる児童書の専門図書館として運営されています。平成の改修工事で、ガラス部分の増築、内装の復元・保存、地下部分の免震化などを行い、新旧が共存する建物に再生されました。

国立国会図書館では、100周年にあたる2006年に、展示会・セミナー・ホームページ（記念サイトの掲載）をメインとした「旧帝国図書館建築100周年記念行事」を開催いたしました。

展示会

展示会（期間：9月26日～12月17日）では、国立国会図書館が所蔵する史料を展示し、帝国図書館から国立国会図書館支部上野図書館、国立国会図書館国際子ども図書館として続いてきた歴史を紹介しました。また、パネルなどによって各閲覧室の新旧対比、改築された建物の技術的な側面も紹介しました。さらに、会場には来場された方が図書館に対する思い出などを綴るコーナーを設置し、日本人はもちろん、外国人の方からもたくさんのご記入をいただきました。*当展示会は一部を再構成し、平成18年12月21日～平成19年2月20日に東京本館でも開催。

セミナー

セミナー（9月30日開催）では、まず午前の部で国際子ども図書館職員が案内役となり、51名の参加者に見学ツアーを行いました。この見学では、通常はご覧いただけない屋根裏の木製の小屋組や、地下にある免震層部分などをご覧いただき、建物の歴史、構造、特色等について現場で説明を行いました。

午後の部では、講演会を行い、84名の参加がありました。黒澤隆雄国立国会図書館長の主催者挨拶に続き、第一部では江戸東京博物館都市歴史研究室助教授の米山勇氏が「明治の近代建築」と題し、建物の画像を示しながら、西洋建築の様式の変遷と、西洋建築の日本への移植期である明治期建築の特色および旧帝国図書館の建物の持つ雄大さについて話されました。

第二部では神戸芸術工科大学名誉教授の坂本勝比古氏が「旧帝国図書館と上野の杜の文化的ストックー近代建築発展の中で」と題し、帝国図書館建築までの軌跡と建築関係者の群像を紹介し、上野公園の文化的ストックの豊かさを説明した後、公

園内各文化施設の建築的特徴を伝統回帰とモダニズムの争いという観点から具体的に説明されました。また、旧帝国図書館の建物が国際子ども図書館として再生したことの意味を高く評価していただきました。

ホームページ

国立国会図書館が保持していた約300枚の建築関係の写真などをデジタル化の上、コンテンツを作成し、国際子ども図書館のホームページ上で公開いたしました。これは年代順や、場所順などで各画像にアクセスができるもので、今まで一般の方がご覧いただけなかった画像をコメントと共にご覧いただくことができるようになっています。(http://www.kodomo.go.jp/100th/index.html)

この記念行事が、国立国会図書館国際子ども図書館の建物が持つ価値を広く知っていただく機会となり、また、この建物を明治期建築の遺産として次の世代に伝える一助となることを願っています。

(企画協力課企画広報係)



車寄せ部分から入館する列に並ぶ人々
(現：エントランス) [ホームページより]



明治期の3階普通閲覧室(現：3階本のミュージアム) [ホームページより]

イングラム・コレクションで学ぶ、初期のイギリス絵本

吉田 新一

コールデコットの『森のふたりの幼い子ども』

現代絵本の扉は19世紀半ば過ぎ、ウォルター・クレイン、ランドルフ・コールデコット、ケイト・グリーンナウエーの3作家によって開かれた。これはいわば絵本史の定説であるが、3者の作品は普及版、復刻版などで比較的容易に見る機会があるので、ここでは詳細を省き、国際子ども図書館のイングラム・コレクション（18～20世紀にわたるイギリスの児童書コレクション。以後、〈コレクション〉）にあるコールデコットの『森のふたりの幼い子ども』（VZ1-196 〈コレクション〉の請求記号。以後はVZ1を省き番号のみ記載）[1879]に目を向けてみる。

保存状態のきわめて良いこの初版本はジョージ・ラウトリッジ社の出版、制作は彫版師で出版企画家のエドモンド・エヴァンズである。裏表紙にラウトリッジ社の「シリング・トイ・ボックス」（一冊1シリングのトイ・ブック [toy book]）が79冊も広告されている。（エヴァンズの名がその下の欄外に小さく記されている。）広告の中の50番『ダッシュと子どもたち』、52番『フェアリー・テールのアルファベット』、61番『ペットの子ひつじ』が、トイ・ブックの合本である『A.L.O.E.のピクチャー・ストーリー・ブック』（23）[c1871（cは推定年の意）]で見ることができる。



『森のふたりの幼い子ども』表紙

トイ・ブックはラウトリッジ社以外にもいくつもの出版社が競って大量に出版していた。合本されていないシングル・タイトルもの、フレデリック・ウォーン社の『神のみわざ』（90）[c1871]、『ナーサリー・アルファベット』（93）[c1868]、『家庭のペット』（91）[c1879]、『果物アルファベット』（92）[?] などを見ると、当時のトイ・ブックがどのようなものであったか、つぶさに知ることができる。

これらはみな同型なので、『ナーサリー・アルファベット』を例に、その作り方を見てみよう。大きさは縦27センチ、横23センチ、内容は〈一冊一テーマ〉でまとまっている。表紙をめくると、文字と絵が左右いずれかにある〈見開き〉が、その間に〈印刷なしの白紙見開き〉を一つずつ挟みながら6場面ある。視覚的に連続性を断つこれら白紙ページの介在は、ブックメイキング（印刷と製本）の都合で——文字と絵が別々の紙の片面にだけ印刷され、それらを裁断後、文と絵の片を交互に

重ねて綴じたため、印刷されない裏面が白紙として絵や文の間に挟まって——出てきたものである。見開きページで絵が、本の前半では右側、後半では左側にきているのも、同じ理由による。トイ・ブックの表紙に Mounted とあるのは、ページ裏の白紙に布を貼って上製本に仕立てたもので、これも実物によって実感できる。

他にもまだ、*A.L.O.E's Sunday Picture Book, The Life of the Lord Christ* (25) [1871] ; *Little Lily's Alphabet* (677) [c1861] ; *The Snow-White and Rose-Red Picture Book* (972) [c1858] ; *The Toy Book Present* (1044) [1868] ; *Aunt Louisa's London Picture Book* (1073) [1866] ; *The ABC of Animals and Birds* (1092) [c1868] など、内容の異なるトイ・ブックを見ることができる。

エドモンド・エヴァンズはコールデコットにトイ・ブックの制作を依頼したとき、従来の<空白の見開き>にセピア一色だが線画をプリントしたい、その線画とカラーの絵をつなげて、一貫して絵が物語る絵本を作りたい、と提案した。これは絵本がトイ・ブックから現代絵本へ飛躍的發展をする創意であった。そしてコールデコットは、エヴァンズの創意を見事に生かして<現代絵本の父>となったのである。すなわち、コールデコットは単彩の線画にユーモアを盛ったり、サブストーリーを加えるなどして、<絵本>を活気とリズムにあふれた統一体に仕立てた。「線は少なければ少ないほど、犯す誤ちは少ない」と絵の簡潔さを尊び、また、単彩画では絵を囲む枠を取り去り、余白を生かして絵に奥行きと広がりを与えたのである。

クレインの『青ひげピクチャー・ブック』

トイ・ブックを現代絵本に飛躍させたもう一つ重要なことがあった。それもまたエドモンド・エヴァンズによる功績であった。

当初のトイ・ブックのカラー絵は、それまでのモノクローム絵と比べて華やかでも、印刷はオイルインクでべったり着色してけばけばしく、芸術性が乏しく、文の語るイメージを単に写しただけのものであった。当時の印刷技術では止むをえなかったであろうが。先の『ナーサリー・アルファベット』、あるいは『家庭のベット』を見ると、表紙の飾り枠の欄外下に、小さく Kronheim & Co.の文字が見えるが、トイ・ブックのカラー印刷は、クロンハイム社や Leighton Brothers 社などがおこなっていて、その印刷は木版と金属版と石版をミックスしておこなわれていた。

これに対してエドモンド・エヴァンズは「小さいときにトイ・ブックのようなものしか与えられていなかったら、美的感覚は養えない」と言って憂えて、カラー印刷の改良を考えた。そして、複数の版木を重ね刷りする日本の浮世絵から、木口木版による重ね刷りを考えだして、試みてみると色の仕上がりがソフトで、品もあることを発見した。そこでこの新技法で新しいトイ・ブックを作ろうとした。その時、ひじょうに有能なデザイナーが彼の前に現れたのであった。1863年、当時18歳だったウォルター・クレインである。エヴァンズはクレインによって1865年に最初の

トイ・ブック3冊を、Ward, Lock and Tyler's 社から出版することができた。

クレインは中世の彩飾写本や日本の浮世絵、また同時代のラファエル前派の絵画などを積極的に学んで、太い輪郭線、彩色の平塗り、むらのない濃い黒色などを特徴とする、木版画にふさわしい、画家の個性の顕著なイラストレーションを生み出した。そのトイ・ブックは<ウォルター・クレインのトイ・ブック>と、初めて作者名が本の表紙にうたわれることになった。先のコールデコットの『森のふたりの幼い子ども』の裏表紙を見ても、既刊のトイ・ブックの中で、ウォルター・クレインのものだけは別に作者名で一括されている。作者名で絵本が売られ始めて、これも現代絵本の始まりの一つとなった。クレインのトイ・ブックは<コレクション>の『青ひげピクチャー・ブック』(284) [c1875] で味わえる。これは1875年にシングル・タイトルで出た『青ひげ』、『赤頭巾ちゃん』、『ジャックと豆の木』と、前年の『昔なじみのアルファベット』を合本し、ハードカバーの表紙に新しいデザインを入れた<特製トイ・ブック>である。が、白紙無印刷のページはまだ介在している。その撤廃は、前記の通りコールデコットのトイ・ブックからであった。また、『青ひげピクチャー・ブック』(トイ・ブックでなく、ピクチャー・ブックという呼称にも注意)では、テキスト(文字)がすべて絵の中の装飾的な枠の中に納められている。これもクレインが日本の浮世絵から学んだもので、たとえば1世紀後ケイト・グリーンナウエー賞を受けたエロール・ル・カインの『ハイワサのちいさかったころ』[1984]などで、同形式が引き継がれて現代も生かされている。

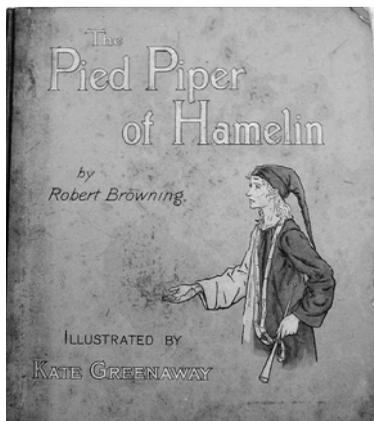
このように、エドマンド・エヴァンズとウォルター・クレインによって、トイ・ブックは現代絵本へ飛躍的發展をとげたが、クレインはやがてエヴァンズの元を去り、ウィリアム・モリスらと結んでモダン・デザインへと活動を広げていった。クレインがエヴァンズから去ったのは、作品への支払い方が不満だったからで、当時は画家の作品は買取りで、クレインは作品がよく売れたのに、最初の画稿代金しかもらっていなかった。エヴァンズは売れっ子のクレインを失い、彼に匹敵する別の画家を至急求め、幸運にもコールデコットに出会えた。しかし、元銀行員のコールデコットは報酬に印税形式を要求した。こうしてコールデコットのトイ・ブックから、初めて売れ高払いの印税支払いが始まった。クレインによって初めて絵本の作家名が表紙にうたわれ、コールデコットによって初めて絵本画家が印税支払いの権利を獲得した。これで絵本は、現代絵本として初めて自立を遂げたことになる。



『青ひげピクチャー・ブック』より
『赤頭巾ちゃん』

グリーンナウエーの『ハメルンの笛吹き』

現代絵本を拓いた三人のもう一人ケイト・グリーンナウエーの絵本もまた、エヴァンズによる制作であった。〈コレクション〉にある彼女の『ハメルンの笛吹き』(473) [1888] は初版本で、これを現行の普及版（とその邦訳版）と対比してみたい。



『ハメルンの笛吹き』表紙

これはネズミの害に苦しむハメルンの町に、斑服の男が現れて笛を吹きネズミを駆除してくれる。が、市当局が約束の礼金を出さなかったので、男は笛を吹き街中の子を連れて消えてしまう、というドイツの有名な伝説による作品だ。現行普及版の表紙には、笛吹きと子どもたちが無垢の楽園へ移り住んだ図が描かれている。が、初版ではその絵は本文の最後に子を持って悲しむ母親の絵の一つ手前に置かれて、表紙には現行版21ページの斑服の男の絵が挙げられている。表紙を開いた見返しでは、現行版は笛とネズミとハメルン市の紋章がデザインされているが、初版は深緑の無地で無装

飾。〈コレクション〉版ではそこに「1888年12月4日、伯父が本書を選び、伯母がこれを贈る」と姪に宛てたペン書きサインがあり、出版の年に贈ったことがわかる。ハーフタイトルの次の内扉も、現行版では37ページの二人の子どもがカットに使われているが、初版ではそれもない。その左側ページに現行版では表紙と同じ絵が挙げられているが、初版では無地無装飾のまま。前後するが本のサイズは、現行版は縦25.5センチ、横22センチ。初版では縦寸法は同じだが横が27.5センチと長い。初版内扉の表題の記述も、物語の作詩者ロバート・ブラウニング（1812-89；[上田敏の訳詩集『海潮音』で「時は春／日は朝／朝は七時」で始まる「ピッパのうた、春の朝」の作者]）の次に、ケイト・グリーンナウエーの名とともに、イラストレーションが35葉であると現行版にない絵の枚数が記されている。

初版では初めの5～19ページに物語詩が先ず挙げられて、カットも挿絵もそこには一切ない。その後にグリーンナウエーのイラストレーション付きで物語詩が読めることになる。従って現行版は全48ページだが、初版は64ページ。（因みにこの物語詩、ブラウニングが後年著名な俳優となった子息ウィリアム・マクレーディのために書いた作者唯一の子どものための作品。）初版では読者は、先ず脳裏に自由にイメージを喚起しながら物語詩のみを読む。次に、改めてグリーンナウエーのイラストレーションで物語を楽しめる、そのように編集がされている。これは読者へ無言だが素敵なサービスだと思う。さらに今一つ相違がある。現行版の34、35ページの見開き左右の絵、これが初版では左右が逆になっている。松葉杖の子のいる絵が右

側にある。すなわち絵のシークエンスは、そこまでが次々と子どもらが笛の音を追ってやってくる様子を描き、足のわるい子が最後に出てくる。そして次のページからは、笛吹きを先頭にした子どもたちの行列に絵は移っていく。初版の絵の流れから、画家の意図はそのように読み取れる。結びは、笛吹きと子どもたちが消えて、松葉杖の子が遅れて悄然としている孤影、次いで笛吹きと子どもたちが移り住んだ楽園、そして、子を失った傷心の母の姿で終わる。ドラマの展開はそのように演出されている。初版は作者自身による校正なので、絵の配列はまさに作者の意図であり、後の誰か別人による変更は、その意図に反する（不要な）装飾と見るべきであろう。

グリーンアウエーは代表作と言われる『マリーゴールド・ガーデン』（475；476）など数点が＜コレクション＞にあるが、中で初版本の『子どもの一日の生活』（474）[1881]は保存状態がよく、作者の長所がよく出ている。クレイン、コールデコットと比べて、残念ながらグリーンアウエーのデッサン力は劣る。彼女を最真にしていたジョン・ラスキンでさえ、彼女に海岸へ行つて子どもの体のアナトミーを学べと忠告していた。しかし、クレイン、コールデコットと比べると、グリーンアウエーは子どもそのものに一貫してこだわりつけている。積極的に子どもそのものを追っている。その意味からグリーンアウエーの『子どもの一日の生活』に私は愛着している。

木口木版画のいろいろ

木口木版の多色刷り絵本を見てきたが、それより前の一色刷り木口木版画に触れておこう。『寓話の花束』（416）[1832]（縦14.7センチ、横10センチ）は、冒頭で「出版社は本書を謹んで若者の後見人へ捧げる」とうたい、古今の寓話150話を＜摘みとり＞、好ましからざるものを＜刈りとり＞仕上げた＜花束＞で、各寓話に1葉ずつ、細部緻密で明暗微妙な黒インキ刷り木版画が付き、いずれも見事である。

木版には板目木版（wood-cut）と木口木版（wood-engraving）の2種があって、後者は（ツゲなどの堅い）樹を輪切りにして年輪が同心円状に見える面に、burin または graver という金属版用刃物で彫刻する。金属板よりソフトな刷り上りで、19世紀末に写真が導入されるまで、世紀を通じて広く使われた印刷手段だった。その実用化に大貢献したのはトマス・ビュイック（1753-1828）で、彼の『四足動物誌』（1790）、『イギリス鳥類誌』2巻（1797, 1804）は、知る人ぞ知る自然誌の古典的名著である。＜コレクション＞にある『初めての動物の本』（1037）[1946]では、詩人ルースヴェン・トッドが「1818年刊のビュイックの『四足動物誌』から選んだ木版画に添えた」押韻詩の詩集で、そこにビュイックによる珍しい四足動物の木口木版の写実画が見られる。ビュイックは工房を構えて弟子たちに広く技術を伝えたので、優れた木口木版の作品が次々現れて、『寓話の花束』はその一例と言えよう。

因みに、ポーン・ホール・ドレイパー師編『改定・旧約・新約聖書物語』（337）[1833]において steel plate engraving（鋼凹版）によるイラストレーションが

見られて、木口木版画と比較できる。銅凹版はアメリカで開発され、銅凹版より耐久性があり、描線も鮮明なので使用されたが、木口木版がその暖かみからより広く愛用された。

『海辺の賜物』(421) [1861] では、木口木版の名手ダルジェル兄弟の見事な作が見られる。これは海岸生物の自然誌で、原画は五人の画家による。リチャード・ダルビーの『<子どもの本>黄金時代の挿絵画家たち』(西村書店)には「ジョージ、エドワード、ジョン、トマスのダルジェル兄弟は、イギリスのヴィクトリア時代中期を代表する木口木版の彫版師で、画家の描いた絵を(それまでの銅板ではなく木口木版の版木に)エングレイヴする彼らの技術は、従来のはるかに手の込んだものであった」とある。ジョン・ラスキンの創作童話『黄金の川の王さま』(927) [初版は1851] のリチャード・ドイルの挿絵、ルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』(219) [初版は1865] のジョン・テニエルの挿絵なども、ダルジェル兄弟の制作であった。彼らの手にかかるると原画よりも美しいプリントができると言われた。『海辺の賜物』の挿絵も、印刷の写真と見まがうほどの、いぶし銀のような仕上がりである。

次に、手彩色された木口木版画を、『グリーンナウエーの花ことば』(471) [1884] のルーツと言える『花ことばと花のエンブレム・アルファベット』(667) [1849] に見てみよう。サイズは縦12.9センチ、横8.5センチとグリーンナウエーの本より小ぶりだが、表紙は赤いクロス装で *The Language of Flowers* と金文字押しがされたデラックス本だ。ヴィクトリア時代中期の若い女性たちに愛用されたのもうなずける。口絵とタイトル・ページ、そして本文中の僅か5ページだが手彩色された版画は、後のカラー印刷では見られぬ美しい色合いを楽しめる。また、本文全60ページにあるモノクロームの植物デザインも美しい。それらは異なる植物を使った粹絵で、中に花の名と花ことばが列挙されていて、魅力的な<花ことばの本>となっている。

『ためになる絵本』(1122) [1860] では、さらに美しい手彩色が30見開きも楽しめる。副題に「動物自然誌からの魅力的な学習」とあり、四足獣を初め、魚類、鳥類、昆虫など、子どもが身近で観察できる動物の<図鑑>である。印刷なしの白紙見開きが出てくる本だが、上の『花ことば』より10年後の出版なので、手彩色はいっそう美しい仕上がりで、カラー印刷では味わえぬ、ぬくもり、暖かみが感じられる。

印刷メディアの発達と packager の働き

1798年にドイツで開発された石版印刷(平版)は19世紀半ばから実用化された。ジョージ・ラウトリッジ社による『若き日のチャイムとライム』(241) [1871] では、レイトン兄弟による色鮮やかな多色石版刷りが見られる。原画はドイツから渡った画家オスカー・プレッチで、表紙を開くと少女が玄関の外でドア・ベルの紐を引く絵があり、次の口絵はその少女が屋内で部屋のドアを開けようとする場面で、読者を本の中へ招き入れる工夫が絵でなされている。馬の蹄鉄屋、粉引き風車、煙突掃

除、薬屋、郵便屋などが挿絵と共に短いライム詩で語られている。中の1話に本屋があり、少年が‘Buds and Flowers’や‘Schnick-Schnack’を面白く読んだがもっと面白い本が欲しいと言うと、店主は‘Full of pictures, all coloured so bright’な本、と言って新しい本を手渡しているが、この「とても華やかな色彩の絵がいっぱいの本」ということばから、当時そういう本が愛好されていたことがうかがえる。

児童文学作家 J. H. ユーイング作で R. Andre 画の『お婆さまの春の唄』(363) [1885] も多色石版刷りオールカラーの美本で、『若き日のチャイムとライム』と比べて色調も落ち着き、多色石版刷りの進歩を実感できる。が、多色石版刷りはコスト高で子どもの本での使用は短期間だったという。同時期のエドモンド・エヴァンズによるコールデコットのトイ・ブックなどの木口木版重ね刷りによるカラー印刷と並べると、やはり軍配は、品も仕上がりのいいエヴァンズの方にあげられる。

以上概観したように、19世紀の本のイラストレーションは、印刷メディアの発達と共に進歩した。時が進み新たに可能となったメディアを最大限生かして、出版はおこなわれ、イラストレーターは技と想を練った。その道筋のおおよそを、今イングラム・コレクションの実物でたどれることは、海外旅行が制限されていた36年前に、それらを調べにカナダ、イギリスへ出かけた私には、まさに隔世の感がある。

上記に続く時期から印刷に写真が利用され、half-tone process (網版法) が始まる。20世紀の幕開けにはそれで「ピーターラビットの絵本」がデビューし、いわゆる<ブックス・ビューティフルの時代>も拓かれる。さらにはオフセット印刷の導入で、印刷はまた大革新をとげる。アーティストたちはそれぞれの技術革新の恩恵を受けて、旺盛に創造活動を進め、絵本芸術は著しい進歩を遂げることになるのである。

最後にもう一つ、19世紀の初期絵本の発展を通覧するとき注目すべきは、作家と読者を仲介する人の働きであろう。いわゆる packager (企画から出版まで請け負う業者) の存在で、エドモンド・エヴァンズに代表されるように、本は、出版企画、作家への依頼、制作、編集などすべてが一手でおこなわれ、販売する出版社へ手渡されていた。現代のように仕事が細分化され、分業化される以前で、ある意味で熟練の個人によって、全体が統一された完熟の作品が生まれたのは、おそらくそのためであつたろう。この分野の研究もまた、この時期の絵本の発達を考えるときに必要なことと私は思っている。

(よしだ しんいち 国立国会図書館客員調査員、立教大学名誉教授)



『若き日のチャイムとライム』内扉

遠くから眺めるハンガリーの児童図書事情

深谷 ベルタ

はじめに

一昨年の秋、私は国際子ども図書館から一本の電話をいただいた。「国際子ども図書館所蔵のハンガリー児童図書を評価し、さらに購入計画のため、選書リストを作ってほしい」という依頼だった。故国ハンガリーの児童図書を徹底的に調べる機会に恵まれたのは初めてのことで、私は喜んで引き受けた。このチャンスを与えてくれた国際子ども図書館にお礼を申し上げたい。

日本で、かなりよく知られている絵本『ラチとらいおん』の著者、マレーク・ペロニカがハンガリー人であることを知る読者は少ない。内容さえ良ければ、著者の出身地はさほど関心を引かない。子どもたちに「お話」を届ける私自身も、著者の出身地で本を選ぶことはしない。しかし、今回はまさにこの出身地で選択する機会を与えられた。作業を通して得た感想をまとめる機会もいただいたので、作業方法とともに、私の感想も述べたい。

リスト作成にあたって

- ・リスト作成にあたって私が「基地」のように利用したのはオンライン・ブック・ストア (<http://www.konyvkereso.hu/>) のカタログだった。このポータルは、最も多くのタイトル数を揃えているという点でハンガリー国内において定評のあるブック・ファインダーだ。10,000前後のタイトルが並ぶ児童図書コーナーもあり、リスト作成にあたって実にありがたい情報源となったのだが、市場に出回る児童図書の大半が実は翻訳本で、ハンガリー人作家の作品はおよそ3割弱に過ぎないことも判明して、少し複雑な思いで受け止めた。
- ・選択の対象は原則として現在購入可能な図書に限られていたので、作成したリストは決してハンガリーの児童文学全体を概観するための文献目録ではない。再版も含めて最近出版された児童図書の中から、古典から現在の作品まで、バランスよく選び取ったに過ぎない。個人的な好みや主観的価値観を可能な限り避けて、第三者による評価を（たとえば児童文学の専門家や、事実上専門機関の機能も担う IBBY の HP 等を）大いに参考にした。
- ・図書館は原則としてハードカバーを収集対象とするのだが、バーチャル空間で見つけた本を手取ることは不可能だ。それでカバーの素材に関する情報がないことに度々悩まされた。またこんなこともあった。日本では見かけることのない「お経本」を大量に発見した。「本当の本」をまだ大切に扱えない幼い読者のために作られる耐久性に優れた屏風状の本で、開くと一本の長い帯状になる全ページボード紙でできた本だ。この本をどう扱うべきか？名作の中には「お経本」しか

ないものや、「お経本」しか書かない作家もあり、少し惜しい気持ちでリストから外すことに決めた。

- ・さらに「世界共通の知」と考えても良さそうな書籍類は、たとえ作家がハンガリー人であろうと、日本に持ち込まないことに決めた。児童図書として出版される『聖書』や『美しい太陽系』や『微生物界のヒーローたち』等の科学啓蒙書は「世界共通の知」であり、ハンガリー独自の文化に属さない。ただし、オリジナリティーが認められる著書を数点残した。

それにしても明らかに「宗教本」のような児童図書の急増には驚きを隠せない。私を知っているかつてのハンガリー人は宗教関連の話題に実にドライな民族だったのに、一体どうしてしまったのだろうか？最近出版された聖書関連本の山の前で私は自分の浦島太郎ぶりを実感してしまった。恐竜本（ディノ本）の多さも新鮮だった。「柳の下の泥鰌」式に増える恐竜本はここ数年の大ブームであるらしい。さらに、児童図書として体裁の整った「占い本」や「ホラー本」、「オカルト本」が市場に多く登場したことに違和感を覚えた。「エゾテリックな科学本」を、興味のある方には申し訳ないが、諦めることにした。尤もハンガリー人の古い宗教として再認識されつつある「シャーマニズム」に関する児童図書が出版されていたなら、間違いなく推薦しただろうが、今のところは大人向けの書籍しか入手できない。

パソコンの普及と統計から垣間見る出版事情

現在のように出版される書籍が急増し、パソコンを利用できないと、ハンガリーのような小国ですら本にアクセスすることは全く非現実的に思える。インターネットがあるからこそ出版情報が比較的容易に入手できる。経済格差拡大の中で多くの子どもに降りかかる貧困と「デジタル・デバイド」状況による不利を少しでも緩和するために、児童図書のオンライン化が早くから始まった。また、以前に比べて本がかなり高価なものとなり、教科書や教材を買い揃えることで苦勞する家庭も少なくない。良質な児童図書を買う余裕を持たない家庭も多くなった。パソコンの家庭への普及率はまだ高くないが、それでも6～7割程度だと言われる。「文化的資源」へのアクセスを経済的な豊かさおよび地域的制約に関係なく、どの子どもにも確保したいというコンセプトで、国立図書館に当るセーチェーニ（Széchenyi）中央図書館が運営するバーチャル・ライブラリーのMEK (<http://mek.oszk.hu/>)を始め、児童文学のオンライン化が進められており、オンラインで読める／聞ける本が実に多い。ハンガリーは著作権についてヨーロッパ並みにうるさい国だが、それでも日本と違って、書誌データだけではなく、本がまるごと読めるのである。一流の俳優や声優の朗読による音声ライブラリーがラジオ放送局のHPに設けられている。また、ハンガリーの文化遺産の保護や保存、そしてその存在を世に知らせるミッションを持ち、コンピュータの父と呼ばれるハンガリー人のナイマン・ヤーノシュにちなんだ「ナイマン・ハーズ」Neumann-ház (<http://www.neumann-haz.hu/>)

のオンライン図書館も安心して読める場所の一つだ。ハンガリーでは児童図書の研究資料が驚く程少ないが、ここではレファレンス資料も多少揃っているのありがたい。

出版市場に関する統計データもある程度ネットを通して調べられるので、ここで少し紹介しよう。本の専門誌の一つ『新刊市場』（ラッフェルトン（Lafferton）社が2001年から発行する月刊誌）のオンライン版（<http://www.ujkonyvpiac.hu/>）2006年3月1日号によれば、2005年出版市場の総売り上げはおよそ627億フォリント（およそ364億円）で、2004年対比で7.8%増だ。テーマ別に見ると、教科書や教材関係の本が最も多く、全体の26%、これに23.9%で科学啓蒙書が続く。後者の売り上げは年々減少の一途をたどり、「科学離れ」を訴える危機感溢れる記事も同誌に掲載されていた。専門図書や学術書、事典や辞書の減少も劇的で、2003年の20.6%から15.1%に減少。純文学は17.8%で、若干の右肩上がり。肝心の児童図書は総売り上げの何と10%を越えて、一昨年7.9%を大きく上回った。ハンガリー人が買う図書の10冊に1冊は間違いなく児童図書だ！

年間、市場に出る新刊がおよそ10,000～11,000タイトルで、年々10～20%増えているという。総人口が1,000万人弱の国でこの数字が多いか少ないか、私には判断が難しいが、ただ総売り上げとタイトル数の急増に驚いてしまう。30年前から続く「少子化」と「総人口の減少」は読書人口の減少をも意味する。また、数年ごとに行われる読書習慣に関する調査からも浮き彫りにされる「活字離れ」等を考えると、これほど多くの本を一体誰が読むのだろうか、気になるところである。

今はオンライン・ショップがあるおかげで購入可能な本を誰もが検索できる。しかし、パソコンがなければ、購入はおろか、新刊の存在を知ることすら不可能だろう。ハンガリーの書店（小売店）の数はおよそ800店といわれる。数万から数十万冊の本を取り扱うような巨大なブック・ストアは、総人口の2割が集中する首都ブダペストにもない。800店の中で児童図書の専門店がブダペストのポジヨニ・パゴニ（Pozsonyi Pagony）という書店と、その姉妹店の二つだけ。ここでは0歳から14歳までの児童図書を3,000タイトルの中から選べる。専門店ならではの質と量だが、普通の本屋さんでは児童図書は何冊ぐらい並んでいるのだろうか。10冊か50冊か？

また、一体いくつの出版社があるのだろうか？これも気になったので『新刊市場』のアーカイブ資料を調べてみた。この『新刊白書』には650の出版社と700の書店から出版情報が寄せられるとのこと。一方、街角の新聞スタンドで販売される『新刊市場』は、800～900の出版社と750～800の書店の新刊情報をカバーしているという。同じ専門誌なのに、月単位と年単位で書店と出版社の数に大差が出る。体制転換後、特に1996年以降、出版業界も激変の中にある。小さな書店や出版社がシャボン玉のように生まれたり消えたりしていると思うしかない。ちなみに『新刊市場』の上記の統計によれば、本の総売り上げの58%を占める出版社が13社、76.1%は

33社、82.1%は48社であった。92%まで広げれば総売り上げは何と140社の成果だったようだ。つまり、残りの10%弱がその他の出版社の売り上げとなる。要するに、年間1～5冊程度の「生産力」しかないミニミニ出版社が無数にあるということになる。

児童図書といえば、古くからモーラ（Móra）社が唯一の児童書専門の名門出版社であり、その地位を現在も維持しているが、現時点では唯一ではない。1993年に民営化され、株式会社として再出発したが、民営化後の10年間に多くの作家と読者を失ってしまった。現在児童図書を出版する出版社は5～6社あるが、どれもかなり「個性的」に見える。

児童作家としても有名なチュルカ・イシュトヴァーン（Csurka, István）とのインタビュー記事を『新刊市場』のオンライン版で読んだ。彼によれば20年前までは、人気作家の本なら初版10万部ということも珍しくなかった。ところが、「今は有名な作家の作品でさえ5,000部も出ればベストセラーと呼ばれる」。この事実を考えると、たとえば500部しか刷られない新刊を800店の書店にまんべんなく配布することは不可能だということが明らかだ。出版タイトル数がかつてないほどに増えたものの、売れっ子作家ですら発行部数は極端に少なくなった。在庫をかかえるリスクやコストを出版社や取次業者が避けようとするからだろう。西洋人がよく口にする常套句に「時は金なり」というのがあるが、「時空は金なり」と哲学的な語用に言い改めた方が今の時代にマッチしているかもしれない。

民族のアイデンティティを示す児童文学

私は民族学者でも言語学者でもないが、常識的には、民族としてのアイデンティティを支える一番重要な要因は言語そのものだと思う。民族としての独自性や属性を内外に示すものがいろいろあるにしても、言語のように明確で安定したものは他にないような気がする。とりわけ多数の民族が入り交じるヨーロッパでは、人間の外見は必ずしも当てにならない。顔より言葉の方がより確実な識別の手がかりとなる。私たちが初めて覚える言語を母語と言うが、母語を自分で選択できる人はいないし、努力して身につける言葉でもない。私たちが生まれる前から「既にそこにある」し、皆どこかの言語共同体の中に生まれ落ち、その中に埋め込まれて言葉を獲得する。そのような意味で母語は私たちの個人としてのアイデンティティをも支えるツールだ。バイリンガルの人は決して珍しい存在ではないが、それでも特例だと言える。本来、一つの言語は一つの民の存在を示す。確かに既に過去のものとなった死語も無数にある。ハンガリー語は現時点でまだ健在だが、「絶滅種に属する」と懸念する声もある。

現在のハンガリーの児童文学について調べた際に、私はこの言葉と民族アイデンティティの密接な関係はかなり強く感じ取った。人口減少に悩むこの国では民族性とハンガリー語の存続可能性を、危機感を持って語る声が決して珍しくない。尤も、

そのような人口減少の悩みがなくても、自国の文化を維持し続けるために、どの国でも国語の教育にかなりのエネルギーが注がれることは普通だ。それにしても、ハンガリーの児童文学の中で最近民話や昔話などが顕著に増えたことは偶然の結果ではないだろう。オンライン・ショップのカタログを調べて、かつてないほどの民話集や昔話集の多さに私は戸惑いを隠せない。この現象の背景に一体何があるのだろうか？EU 統合により加速した「新たなグローバリゼーション」に対する危機感なのか、それとも複雑な歴史的な背景を持つ隣国との間に未解決のままで横たわる「少数民族の問題」に対するある種意思表示（ナショナリズム）なのか？答えるのは容易ではない。

美しくなった本—イラストレーションの発達

今年のボローニャ国際児童図書フェアに、特別ゲストとして30人のハンガリー人イラストレーターが招待されたことを私は新聞の報道で知った。素晴らしいイラストレーターが昔からいたものの、30年前までの児童図書のほとんどは基本的にテキスト中心だった。それに比べ、最近の児童図書は（大人の本も）実に綺麗になった。デザインも間違いなくよくなった。イラストレーターの手による綺麗な絵が多く、芸術性に優れ、児童図書の質向上に貢献している。絵そのものが既にテキストと同等の市民権を獲得し、子どもに語りかける媒体として同等な位置を占めるようになった。当然ながらビジュアル化の中であまり好ましくない現象も確かに起きている。チープでキッチュなテイストの絵本の登場だ。言うまでもないが、大衆消費社会では後者の方がビジネスとしての成功に繋がりやすい。

日本では児童図書として相当なシェアを獲得しているがハンガリーの児童文学界にはいまだにほとんど見当たらないジャンルもある。マンガ本だ。私は今回、児童文学のバーチャル本棚にマンガ本を1冊も発見できなかった。国内において高く評価されるアニメ作家の作品が稀に本の形で出版されることはある。しかし、おそらく子ども向けのマンガを描く作家がいまだにいない。聞くところによれば、ハンガリーの子どもたちもマンガを好んで読んでいるようだが、そのほとんどは日本のマンガだと言う。

詩的言語の力—盛んな詩集出版

児童図書全般に関して言えるもう一つの特徴は詩集の多さだ。事実かどうかは別として、ハンガリーには昔から詩人が多くよく言われる。散文より韻文の方が大きなウェイトを占めることは言語による特徴なのか、それとも文学の地域性によるものなのかはわからない。ただ、この国では詩人の発する言葉の影響力が歴史的に見ても非常に大きかったことは事実だろう。ハンガリーにも波及した1848年の革命で戦死した19世紀の国民的な詩人の一人、ペテーフイ・シャーンドル（Petőfi, Sándor）が現在でも歴史的な英雄だ。彼の詩は見事な政治演説でもあり、数千、数

万人を動かす力があった。彼の言葉は中国の作家魯迅にまで届いたという。20世紀にも国民的詩人として尊ばれる詩人がいる。ヨーゼフ・アティラ (József, Attila) だ。二人とも児童詩も残している。冗談半分とは言え、彼らの詩を暗誦できない子どもはハンガリー人としての資格がないと揶揄される。現在でも幼児期の国語教育の中心は間違いなく詩だからだろう。

「児童詩」に本格的なブームをもたらしたのはヴェレシュ・シャンドル (Weöres, Sándor) という詩人の登場と、70年代前半に見事な訳で出版された『スウェーデン児童詩集』だろう。この詩集は子どもたちの詩が並ぶ小さな地味な本だったが、大人によって書かれたそれまでの「児童詩」を根底から変えてしまった。子どもたちの率直な言葉から伝わってくる詩的な感受性や、子どもが感じ取る世界の不思議さに共感する詩人が現在も少なくない。童心を尊ぶ「児童主義」とは無縁の言葉で、幼さを感じさせないストレートな言葉で書かれたこれらの詩には紋切り型の可愛らしさを発見することが難しい。ある意味では大人を追い込むような詩が少なくない。昨年 IBBY のハンガリー支部により「2004年の児童図書賞」に選ばれたのはやはり詩集だったが、そのタイトルも『愚かな大人』だったことは偶然ではないだろう。

児童文学をめぐる研究の現状

最後に国内の児童文学界全体の特徴として、研究書の少なさと専門家不足を挙げざるを得ない。児童図書はよく売れる人気商品のようなのだが、児童文学自体に対する位置付けは高いとは決して言えない。よく言えば成長期だろう。児童図書はよく売れているにもかかわらず、文芸誌の特集号等に稀に掲載される論文、エッセイやインタビュー記事等を除けば、児童文学に関する研究資料はないに等しい。児童文学の専門家と呼ばれる人は5本の指で数えられる程度だ。当然ながら、お互いに顔見知りの小さな世界だ。私もいろいろと調べてみたが、今回は1999年に出版された『児童文学』(コマーロミ・ガブリエッラ (Komáromi, Gabriella) 編、ヘリコン (Helikon) 社) と題する論文集兼教科書以外に研究書らしい書物を発見できなかった。しかも、これも非常に手厳しい批評を受けた書籍だった。児童文学に何らかの専門的な関心を寄せる人は基本的に文学を専門とする研究者ではなく、教育者や、社会学者、あるいは児童図書の編集者だ。もちろん、こうした人々が児童文学を論じて悪いというわけではない。しかし、彼らの視点と価値観は、文学者のそれとは大きく異なる。教育者は児童文学に対してどうしても教育的な価値を求めがちだし、社会学者も独自の観点からのみ児童図書を分析する。こういった独特な分析や解釈の偏りは、児童文学を深く理解しようとする心理学者にも当てはまるだろう。文学者として最近登場したロヴァース・アンドレア (Lovász, Andrea) 等の若手研究者の成長と活躍に期待するしかない。

(ふかや べるた 大妻女子大学家政学部児童学科非常勤講師)

セミオーダーで承ります —子ども向け見学—

児童サービス課では、毎週火曜日から木曜日まで、幼稚園・保育園・小学校・中学校・各種学校など、15歳までの子どもたち（団体）を対象とした見学を、事前申込制で行っています。一言で「見学」といっても、その内容はさまざまです。実際に館内を見て回る館内見学はもちろん、ご要望があれば、おはなし会、調べ学習、図書館や司書の仕事に関する質問やインタビューなどにも対応しています。そこで今回は、その見学の様子を少しだけご紹介します。

《10匹こぶたでお出迎え（幼稚園・保育園向け）》

幼稚園・保育園の子どもたちは、館内見学というよりは、おはなし会と、子どものへやで職員や付添いの方と一緒に本を読む自由時間が主な見学内容になります。

おはなし会では、初めて入るおはなしのへやに、子どもたちは幾分緊張気味です。そんな子どもたちのために、担当者は、ちょっとした工夫をしています。



10匹こぶた

ある保育園の子どもたちが見学に訪れた時には、とっておきのお友だち「10匹こぶた」（軍手の指1本1本がぶたになっているものです）を連れておはなし会に臨みました。こぶたたちが登場した途端、「わーっ！」という歓声があがり、その場の雰囲気が和みました。

次はおはなしです。その日のおはなしは日本の昔話で、「鳥吞爺」。中には、おはなしの世界に入り込んで、おじいさんと一緒に舌を出したり、おへそから出た鳥の尻尾を引っ張ったりしながら聞いている子もいます。

それから絵本の読み聞かせです。その日読んだ絵本の中の1冊、『てぶくろ』は、「知ってる!」、「持ってる!」という声がたくさんあがりました。でも、知ってる、持ってる、と言っていた子ほど、いざ読み始めると絵本の世界に入りこんで、とてもよく聞いてくれるのです。このような時には、長年読み継がれてきた絵本の力を実感します。

《図書館満喫コース（小学校向け）》

小学生の見学の定番は、館内見学、おはなし会、自由時間という構成の、たっぷ

り時間をかけて国際子ども図書館を満喫するコースです。

当館は100年前に建てられた帝国図書館を改修・増築した建物なので、子どもたちが入ってきて大階段を目にした途端、「ハリー・ポッターみたい!」、「お城の階段みたい!」などと声があがることもあります。その大階段を一気に3階まで上って、ホールで館内紹介ビデオを見た後、職員が実際に館内を案内しながら見て歩くと、高い天井や古い壁、照明器具、張り出し窓、手ふきガラス、床から風が吹き出す空調設備など、子どもたちはいろいろなところに興味を示します。

館内見学が終わると、おはなし会です。おはなし会ではクラスの雰囲気がとてもよく出て、同じおはなしをしても、同じ反応はまずありません。

子どものへやでの自由時間では、子どもたちが各々、自分の読みたい本を探して読み始めます。おはなし会で使った本を読みたい、と言って真っ先に探す子がいると、担当者は、おはなし会でこの本を紹介してよかった、と嬉しくなります。他にも子どもたちは、「おもしろい本」、「おばけの本」、「魔女の本」、「虫の本」、「サッカーの本」など、興味のある本について職員にたずね、お目当ての本が見つかったら、思い思いの場所に座って読んでいます。子どもたちが帰ったあとの書架は、あちらこちらに本が「出張」していて整理が大変ですが、その分、たくさん本に出会ってってくれたのだな、と、幸せを感じるひとときでもあります。

《May I help you? (中学校向け)》

中学生の見学は、館内見学に加えて、「外国について調べる」などのテーマに沿って調べ学習をしたり、司書や図書館の仕事についてのインタビューをしたり、おはなし会を聞いたり、さまざまです。調べ学習では、担当者が資料の探し方・調べ方をアドバイスしたり、資料の紹介をしたりしています。また、子どもたちからのインタビューでは、どうすれば司書になれるか、司書の仕事のやりがい、仕事で楽しかったこと・つらかったことなど、いかにも十代の子らしい直球の質問を投げかけてきたりもします。

中学生は、修学旅行のグループ行動の時間に訪れるのがほとんどです。ある時は、初めて子どもたちだけで移動や時間の管理を任されて、うっかりお昼ごはんを食べ損ねそうになったグループがあったため、担当者は急遽見学時間を早めに切り上げて、子どもたちを次の目的地へ送り出さなくてはなりませんでした!

《まさに「国際」(インターナショナルスクールや日本語学級向け)》

時には、インターナショナルスクールや日本語学級の子どもたちも見学を訪れます。中には毎年のように訪れる学校もあり、担当者が初めの挨拶をする時点で、「前のときもお姉さんだったよ!」と担当者の顔を覚えていたり、「去年来た時にホットケーキのおはなし聞いて、“わしのうちの…”っていうのをやったよ!」などと言いながらさっそく昨年覚えたわらべうたを披露したりしてくれる、元気のよい子

もいます。

インターナショナルスクールの子どもたちからは、館内見学の間も、こちらが説明をするそばから、間髪入れずに感想や質問が飛び出します。中には、日本語があまり得意でない子や、英語しか話せない先生もいるのですが、そんな子や先生には、バイリンガルの子がしっかり通訳をしてくれるので、担当者も安心して説明を進めることができます。

また、自由時間に、世界各国の原書を読みふける子がいたり、3階のメディアふれあいコーナーで「絵本ギャラリー」の英語の朗読を楽しんだりする子がいるのも、インターナショナルスクールならではの光景です。

《うんとこしょ！どっこいしょ！（養護学校向け）》

年に数回、養護学校の子どもたちも見学を訪れます。

ある養護学校小学部の子どもたちが見学を訪れた時のことです。おはなし会で、大型絵本『おおきなかぶ』の読み聞かせをしました。すると、おじいさんが「うんとこしょ どっこいしょ」とかぶを引っ張る場面では、一緒になってかけ声をかける子どもたちの大合唱が起こり、その場面に続く「それでも かぶは ぬけません」という箇所を読むと、子どもたちは本当に困った表情をうかべて、頭や手を左右に振っていました。子どもたちも登場人物と一緒に、あるいは登場人物になりきって、かぶを抜こうとがんばってくれたのでしょうか。

このように、児童サービス課では、一人でも多くの子どもたちが、国際子ども図書館で楽しい時間を過ごし、お気に入りの本に出会えるようにと願いながら、日々見学を行っています。そして、当館での見学をきっかけに、図書館の便利さや本の魅力に気づき、地域や学校の図書館に足を運んでくれたら、と考えています。

また、私たち職員も、見学を通して得ることはたくさんあります。子どもたちがおはなしや絵本を全身で楽しむ様子を目の当たりにすると、子どもたちと本の出会いの場を提供することの大切さを再認識しますし、それぞれ異なる興味を抱いている子どもたちの個々の求めに応じて、的確な本を紹介することの大切さも日々実感しています。こうした見学での経験が、普段の選書やレファレンスなどの業務にも生きてくるのです。

もし、今回ご紹介した見学に少しでも興味を持っていただけましたら、お気軽にお電話でお問い合わせください。これからも見学を訪れる多くの子どもたちに出会えることを、楽しみにしています。

(児童サービス課)

絵本ギャラリー「江戸絵本とジャポニズム」 「子どもの本 イメージの伝承」提供開始

国際子ども図書館は平成18年5月5日のこどもの日に、ホームページ上の電子展示会「絵本ギャラリー」(<http://www.kodomo.go.jp/gallery/>)で、「江戸絵本とジャポニズム」、「子どもの本 イメージの伝承」の提供を開始しました。絵本ギャラリーは、絵本の発祥から今日までの発展の流れを、内外の貴重な絵本の画像や音声により、インターネット上で紹介するコンテンツで、今回新たに提供を開始した二つのコンテンツのほかに、「絵本は舞台」、「コドモノクニ」、「ユージェントシュティルと絵本画家たち」の三つのコンテンツを公開しています。ぜひお楽しみください。

【江戸絵本とジャポニズム】

江戸時代の庶民に親しまれた草双紙の中から『桃太郎宝の蔵入り』や『鬼の四季あそび』などの10作品を選び、その全ページを、和楽器による背景音乐にのせ、落語家らがわかりやすい現代語訳で朗読しています。併せて、江戸時代の日本文化に影響を受けた『長ぐつをはいた猫』（ウォルター・クレイン絵）と『四角いどうぶつ絵本』（ウィリアム・ニコルソン絵）の2作品を紹介しています。解説では、当時のヨーロッパの絵本が江戸時代の表現技法にどのように影響を受けたのか、うかがい知ることができます。



桃太郎宝の蔵入り



不思議の国のアリス

【子どもの本 イメージの伝承】

18世紀後半から19世紀の欧米の挿絵本を画像で紹介しています。算数や読み書きの本、昔話や冒険物語など、子どもたちの身近にあった本や、『不思議の国のアリス』（ジョン・テニエル絵）や『ラ・フォンテーヌの寓話集』（ギュスターヴ・ドレ絵）など、当時の著名な挿絵画家の作品のほか、現代のアルファベット絵本の源ともいえるホーンブックなど、29作品の絵本画像約2,000枚を紹介する画像データベースです。
(企画協力課企画広報係)

平成18年度「児童文学連続講座—当館所蔵資料を使って」

総合テーマ

「絵本の愉しみ—イギリス絵本の伝統に学ぼう—」を終了して

全国の児童サービスに従事する図書館員の専門性の向上と幅広い知識の涵養に資するため、平成18年10月16日から18日までの3日間、国際子ども図書館が広く収集してきた内外の児童書および関連書を活用した児童文学連続講座「絵本の愉しみ—イギリス絵本の伝統に学ぼう—」を開催した。国立国会図書館客員調査員で立教大学名誉教授の吉田新一氏を監修者に、イギリス絵本に造詣の深い研究者と当館職員が講義を行った。館外から64名（全国19道府県および東京近郊から37名、23区から27名）、国立国会図書館東京本館職員を含む館内職員のべ98名が参加した。

<講義内容>

■ 1 日目 (10月16日)

「ランドルフ・コールデコット」

(吉田新一 国立国会図書館客員調査員、立教大学名誉教授)

コールデコットは絵が物語る手法を確立し、その後の近代絵本発展の原動力となった。マザーグースのことはあそびうたにつけた絵は物語性豊かで、イギリスらしい処世知と余韻を感じさせる。

また、木版画の重ね刷りなど当時の印刷技法を生かした絵本づくりを行った。

「ビアトリクス・ポター」(吉田新一)

ポターはコールデコットの絵本作りの妙技を自家薬籠中のものとした上で、さらに絵本の可能性を大きく広げた。人間観察と動物・自然観察を織り交ぜた視点で創作を行い、動物の描き方など、作品にはナチュラルリストとしての信念や人生哲学が込められている。

「コレクションから—コールデコット、ポター、アーディゾーニ関連資料—」

(千代由利 総務部司書監)

講座で取り上げたイギリス絵本作家三人について、当館所蔵資料から外国語による伝記、伝記資料、評論、書誌、目録等を選び、翻訳とともに紹介した（コールデコット10点、ポター29点、アーディゾーニ4点）。

■ 2 日目 (10月17日)

「エドワード・アーディゾーニ」(吉田新一)

アーディゾーニはユーモアに富む風刺精神と、ドローイングを基本とする挿絵を、



吉田新一講師による講義

19世紀前半のクルックシャンクから受け継いだ。1865年から1920年代までと、第二次大戦後、という二つの<イギリス絵本・挿絵の黄金期>に活躍し、クラシックでオーソドックスなものを守り抜き、イギリス絵本の発展に果たした貢献とその画業を紹介した。

「チャールズ・キーピングー自己表現としての絵本一」

(三宅興子 梅花女子大学大学院教授)

キーピングはイギリス絵本の伝統を受け継ぎつつ、口当たりの良い絵本ではなく、自分の表現したい世界をつねに追い求めた作家だった。それだけに厳しい批判にもさらされ、きちんとした評価を受けてこなかった。1960年代から80年代までの30年間の活動を、作風の変化により5期に分けて解説した。

「絵本ギャラリーの紹介」

(小沼里子 国際子ども図書館企画協力課企画広報係長)

国際子ども図書館の電子展示会として2000年以降、順次制作・公開している絵本ギャラリーの「絵本は舞台」、「コードモノクニ」、「ユーゲントシュティルと絵本画家たち」、「江戸絵本とジャポニズム」、「子どもの本 イメージの伝承」の五つのコンテンツについて、内容と見どころを、実際にパソコンを操作しながら紹介した。

■ 3日目 (10月18日)

「シャーリー・ヒューズー英国で最も敬愛される絵本画家一」

(灰島かり 翻訳家)

ヒューズは英国人の生活そのものを描くリアリズムの作家であり、英国では国民的作家と呼ばれるほどの人気がある。その人気の秘密は彼女の描く子どもの表情やしぐさのみずみずしさ、子どもに注ぐヒューマニスティックな視線にある。なぜ日本では人気がないかを日本の絵本や文化との比較を交えながら解説した。

「アンソニー・ブラウンの画像分析ーイギリス絵本の伝統と革新ー」

(藤本朝巳 フェリス女学院大学教授)

国際アンデルセン賞を受賞したブラウンは、コールデコットの手法を学びつつ、ルネ・マグリットなど超現実主義の画家からも影響を受け、独特の絵本づくりをしている。彼の生き立ちや画家になったいきさつを紹介し、物語の伏線の背景画による暗示、枠絵の多用など、独特の表現法を解説した。

講義では六人の特色あるイギリスの絵本作家の作品を、画像で示しながら具体的に解説・紹介した。選択科目として、館内見学、講義で紹介した当館所蔵資料の閲覧時間を設けた。また、監修者吉田新一氏をアドバイザーとする意見交換会においては、通常の研修ではなかなか学べない絵本の歴史や、絵本の絵を読む方法について実物に即して学ぶことができ大変有意義であったこと、それらの知識を今後の業務に生かしていきたい旨の感想・意見が多く寄せられた。(企画協力課協力係)

活動報告

(平成18年1月～12月)

1. 展示会

国際子ども図書館では、子どもの本のもつ魅力を伝えるとともに、子どもと本との出会いの場を提供することを目的として、国際子ども図書館所蔵児童書を中心に一部他機関から借用した資料を交えて、子どもの本・文化に関する展示会を「本のミュージアム」で行っている。平成18年は、3回の展示会を開催した。

○「もじゃもじゃペーターとドイツの子どもの本」

[平成18年1月28日(土)～7月2日(日) 計124日：入場者数37,736人]

本展示会においては、平成15年度に購入した「もじゃもじゃペーター」コレクション(71冊)を中心にドイツの児童書に焦点をあて、当館所蔵資料のほか国内他機関からの借用資料を加え233タイトルを展示した。



100以上の言語に訳されて流布し

た『もじゃもじゃペーター』(*Der Struwwelpeter*)が、その後の児童文学の主人公像に大きな影響を与えたことを、「もじゃもじゃペーターの歴史と系譜」で辿るとともに、あわせて「ドイツの子どもの本の歴史」を概観した。

本展示会はドイツ連邦共和国大使館が主催する「日本におけるドイツ2005/2006」へ参加し、雑誌や新聞等多数のメディアにも取り上げられた。

展示資料の3分の1ほどにあたる複本を、国際子ども図書館1階の「子どものへや」「世界を知るへや」に開架したが、非常に好評で、『もじゃもじゃペーター』を手にとってページを繰る姿が多く見受けられた(本文3ページ以降を参照)。

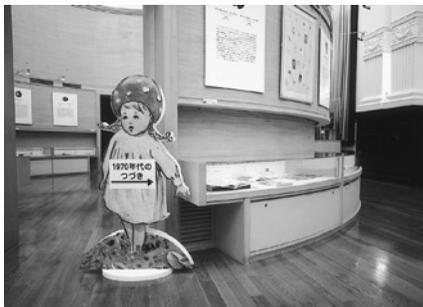
○「北欧からのおくりもの—子どもの本のあゆみ」

[平成18年7月15日(土)～平成19年1月28日(日) 計152日：入場者数61,213人]

北欧はヨーロッパの北部、スカンジナビア半島を中心としてデンマーク、スウェーデン、ノルウェー、フィンランド、アイスランド、フェロー諸島におよぶ地域である。国や民族の歴史、言語に違いは見られるものの、厳しい寒さや自然のなかで育まれた伝承や童謡や神話など共通する点も数多く見出すことができる。

国際子ども図書館の所蔵資料を中心に、北欧における子どもの本の成り立ちから

現代までの歴史をたどりながら、各国を代表する作家・画家とその作品を紹介した。また、神話・カレワラ・昔話、トロール、トムテとニッセ、北欧の四季など北欧にまつわるテーマを選んだ特別コーナーも含め、320点に上る北欧の子どもの本を展示した（本文11ページ以降を参照）。また、平成19年1月17日には皇后陛下の行啓があり、展示会を観覧された。



○「旧帝国図書館建築100周年記念展示会」

〔平成18年9月26日(火)～12月17日(日) 計68日：入場者数26,920人〕



旧帝国図書館建築100周年記念行事の一環として、記念展示会を国際子ども図書館で開催した（一部を再構成し、平成18年12月21日(木)～平成19年2月20日(火)に東京本館でも開催した）。

また、展示会に対する観覧者の理解をより一層深めるため、旧帝国図書館建築100周年記念セミナーを実施した（本文17ページ以降を参照）。

2. イベント

国際子ども図書館では、各展示会期間中、展示内容への理解をより一層深めるため、展示会に関連した講演会やギャラリートーク等のさまざまな催物を開催している。

○公開対談『ゆめいろのパレットⅡ』の原画と絵本を語る』

〔平成18年1月10日(火)：参加者80名〕

「ゆめいろのパレットⅡ－野間国際絵本原画コンクール入賞作品 アジア・アフリカ・ラテンアメリカから」展の関連行事として、それぞれ当コンクール国際審査員である、画家のスズキコージ氏と、安曇野ちひろ美術館館長松本猛氏による公開対談を実施した。展示中の原画の映像を交えた対談は対談者の絵本や原画に関する豊かな経験と見識を踏まえたもので、非常に充実し、かつ楽しいものであった（口絵参照）。

○講演会「ドイツの子どもの本の歴史」

[平成18年2月4日(土)：参加者97名]

「もじゃもじゃペーターとドイツの子どもの本」展の関連行事として、本展監修者で関東学院大学教授の吉原高志氏による講演会を開催した。17世紀のヨーロッパにおける「子ども」という観念の発見、その後のドイツ語圏を中心とした子どもの本の紹介、一見啓蒙主義的であるが、子どもを独自の存在としてとらえ、「ナンセンス」の要素も持つ『もじゃもじゃペーター』の成立についての説明があった。続いて、20世紀以降のケストナーの文学に見られる対立と統一というドイツ的特質、反権威主義的児童文学からファンタジーの復権に至る子どもの本の流れを概観した(口絵および本文4ページ以降を参照)。

○講演会「児童文学に見る子ども像—もじゃもじゃの系譜」

[平成18年4月22日(土)：参加者83名]

子ども読書の日の行事および「もじゃもじゃペーターとドイツの子どもの本」展の関連行事として、前お茶の水女子大学学長の本田和子(ますこ)氏による講演会を開催した。

この講演は、古今東西の児童文学に登場する魅力的な主人公たちの中から、「もじゃもじゃ頭」で作品世界を飛び回る主人公を選び出し、「もじゃもじゃ」が象徴するものについて考える、というテーマで行われた。児童文学から「もじゃもじゃ」たちを抽出しつつ、それらが産み出された時代との相関関係を読み解き、現在の状況に注意を喚起する広い視野を備えた意義深い講演であった(口絵および本文4ページを参照)。

○講演会 第1部「近くて遠いムーミン谷」

第2部「北欧へのいざない—北欧の子どもの本と展示会の見どころ」

[平成18年7月15日(土)：参加者95名]

「北欧からのおくりもの—子どもの本のあゆみ」展の関連行事として、翻訳家で聖心女子大学教授の富原眞弓氏(第1部)と、本展示会監修者で東海大学助教授の福井信子氏(第2部)による講演会を行った(口絵参照)。

第1部：トーヴェ・ヤンソンは「ムーミン」シリーズの著作で知られ、当展示会でも代表的な作品を展示している。講師はヤンソン作品の翻訳を数多く手がけており、ヤンソンとも親交があった。講演ではトーヴェ・ヤンソンの人物像とその作品の紹介が行われた。数多くのヤンソン作品から「ムーミン谷」についての記述を引用し、また、ヤンソンの最後の絵本作品である『ムーミン谷へのふしぎな旅』(1977年刊)に触れながら、作品の構成や仮想の世界への導入についてわかりやすく解説するなど、ヤンソン作品を深く味わうことのできる示唆に富んだ講演であった。

第2部：まず、子どもの詩の朗読がCDで紹介され、各国・地域の言葉の響きを味わった。次いで、展示のうち、時代順に構成された部分について、時代性、作品の背景解説を交えた見どころの紹介が行われた。また、テーマ別に資料を展示した特別コーナーについては、それぞれのテーマと特徴のある資料について詳しい解説が行われた。展示会の意義と展示資料についての理解を深める有意義な講演であった。

講演会終了後、展示会場において同講師によるギャラリートークを行った。

○旧帝国図書館建築100周年記念セミナー

① 見学ツアー

② 講演会

第1部「明治の近代建築」

第2部「旧帝国図書館と上野の杜の文化的ストックー近代建築発展の中で」

[平成18年9月30日(土)：見学ツアー参加者51名 講演会参加者84名]

旧帝国図書館建築100周年記念行事の一環として、国際子ども図書館職員による見学ツアーと、建築史の専門家2名による講演会を実施した(口絵および本文17ページ以降を参照)。

○講演会 第1部「ノルウェーの子どもの本の歴史」

第2部「スウェーデンの子どもの本とその魅力」

[平成18年11月9日(木)：参加者76名]

「北欧からのおくりものー子どもの本のあゆみ」展の関連行事として開催した。

第1部：講師のカーリン・ベアテ・ボル氏は、1985年から約20年間ノルウェー児童書研究所長であり、1994年ノルウェー児童文学者賞を受賞した児童文学の専門家である。講演では、ノルウェー児童文学の歴史を辿りながら各時代の主要な作品や作家・画家について豊富な画像を交え紹介した。また、ノルウェー児童書研究所の役割や国立ノルウェー図書館との関係についても言及した(口絵参照)。

第2部：翻訳家で当展示会スウェーデン語資料の監修者である菱木晃子(あきらこ)氏が、展示会出展資料を中心に、年代を追ってスウェーデンの子どもの本と作家や画家を画像で紹介し、スウェーデン児童文学の特徴と魅力を述べた。また、自身の翻訳活動におけるエピソードをユーモア溢れる語り口で紹介した。

質疑応答では北欧の児童文学や児童書研究所の運営などについての活発な質問が寄せられ、平日の開催にもかかわらず盛況であった。

○ギャラリートーク

〔平成18年7月15日(土)、8月9日(水)、
9月2日(土)、10月14日(土)、11月19日
(日)、12月16日(土)、平成19年1月20日
(土)〕

「北欧からのおくりもの－子どもの本のあ
ゆみ」展の期間中、展示会監修者の福井信子
氏、稲垣美晴氏、菱木晃子(あきらこ)氏に
よるギャラリートークを計13回開催した。



福井信子氏によるギャラリートーク

○「児童文学連続講座－当館所蔵資料を使って」

〔平成18年10月16日(月)～18日(水)：館外64名、館内からのべ98名〕

総合テーマを「絵本の愉しみ－イギリス絵本の伝統に学ぶ－」として、全国の公
共図書館等において児童サービスを担当する職員と国際子ども図書館職員を対象と
した児童文学連続講座を開催した(本文36ページ以降を参照)。

○第8回図書館総合展

図書館界と図書館関連企業による最新情報の交換の場として行われている図書館
総合展が11月20日(月)から11月22日(水)まで、横浜市のパシフィコ横浜展示ホール
で開催された。7回目の出展となった今年も東京本館と共に参加した。出展内容は
電子図書館事業と資料保存の紹介が中心であった。国際子ども図書館の広報を行う
ために、会場内でパンフレットの配布、ホームページのデモンストレーション等を行
った。

3. 児童サービス

○「子どものへや」「世界を知るへや」の小展示

昨年に引き続き以下の五つの箇所以小展示を実施した。表紙を見せて本を展示す
ることにより、多くの子どもが興味を持ち、手にとって楽しんでいた。

なお、平成18年12月より、国際子ども図書館ホームページで、下記の小展示のうち
※を付したものの内容リストを掲載し、また、同内容の印刷物を展示期間中配布した
(当館ホームページ「子どものへやから」－「お知らせ」－「今月の小展示」参照)。

<子どものへや：A>

「白銀の世界－ゆきのほん－」(平成17年12月～平成18年1月)

「春をまつ 春をたのしむ－立春から春分まで－」(2月～3月)

「みどりのほん」(4月～5月)

「あめのほん」(6月)

- 「なつだいすき」(7月～8月)
- 「おいしい秋」(9月～11月)
- 「冬のおまつりークリスマス編ー」(12月) ※
- 「冬のおまつりー新年編ー」(12月～) ※

<子どものへや：B>

- 「時のふしぎー時間と時計の本ー」
(平成17年12月～平成18年2月)
- 「おつきさまのはなし」(3月)
- 「なかよしこよし おともだち」
(4月～5月)
- 「みずべのほん」(6月～7月)
- 「作ろう 作ろう」(8月)
- 「北極・南極」(9月)
- 「おおきい?ちいさい?おおきさいろいろ」(10月～) ※



<世界を知るへや：A>

- 「世界のおはなし 冬のまき」(1月)
- 「世界の布と衣服ー綾なす・まとうー」
(2月～5月)
- 「世界のことば・日本のことば」
(6月～11月)
- 「うたおう!おどろう!」(12月～) ※

<世界を知るへや：B>

- 「もじゃもじゃペーターとドイツの子どもの本展関連展示」(1月～7月)
- 「北欧からのおくりものー子どもの本のあゆみ展関連展示」(7月～) ※

<世界を知るへや：C>

- 「かずの本」「ABCの本」(通年展示)

また、廊下に面した二つの小窓に、季節や行事にあわせて手作りした折り紙や人形などを本とともに飾り、子どもが親しみやすい雰囲気作りを心掛けた。

○「子どものへや」「世界を知るへや」での読書キャンペーン

昨年に引き続き、今年も子どもたちに本の魅力を伝えるための企画として「夏休み読書キャンペーン2006」を行った。今年も本を読んで問題に答える形式にした。

設問のカードを初級編・中級編・上級編の三つに分け、子どもたちの年齢に合わせた本を読んでもらえるよう配慮した。そのため、昨年の3倍近い800名以上の子どもたちの参加があった。小さい子どもたちや、やり方のよくわからない子どもたちには、職員が一緒について本を読んだり説明したりしたため、フロアワークの機会が格段に増えたことも収穫であった。

○子どものための催物

<子どものためのおはなし会>

職員によるおはなし会を、毎週土曜日・日曜日の午後2時から（4歳から小学1年生対象）と午後3時から（小学2年生以上対象）実施した。平成18年は合計182回実施し、のべ1,129名が参加した。

おはなし会では主にストーリーテリングと絵本の読み聞かせを行い、紹介した本のタイトルなどを記したプログラムを参加した子どもに手渡している。昨年7月末より実施している「おはなし会カード」の配布も、継続している。参加ごとにスタンプを押印するカードには、1～2枚目までは5個、3枚目以降は10個のスタンプ欄がある。平成18年には複数名が延べ20回以上参加し、4枚目以降のカードを受け取った。

<ちいさな子どものための絵本の時間>

昨年に引き続き、3歳以下の子どもとその保護者1名を対象として、月に2度（第3土曜日とそれに続く日曜日の午前11時から）開催した。平成18年は合計36回実施し、のべ141組313名が参加した。絵本とわらべうたを組み合わせ、その日の参加者の年齢や個性に合わせたプログラムで行っている。日頃、わらべうたに親しむ機会の少ない参加者も、同じ遊びを繰り返し行ううちにすっかり覚え、素朴なメロディーや遊びを存分に楽しんでいた。最近は父親の参加も徐々に増えてきている。

<子どものためのおたのしみ会>

春休み、こどもの日、冬休みには、4歳以上を対象にして、普段のおはなし会の内容を拡大し、大型絵本の読み聞かせ、パネルシアター、人形劇等を実施している。平成18年は合計8回実施し、のべ135名が参加した。



<科学あそび「いろいろな音を楽しもう～身近なもので楽器作り」>

7月29日(土)・30日(日)、各日2回計4回(各2コース)を、ホールとワークルームで実施した。講師は職員が担当した。今年は4歳から参加可能な「打楽器コース」と小学1年生から参加可能な「管楽器コース」の2コースを設けた結果、両日合わ

せてのべ95名の参加があった。

「打楽器コース」では紙袋のマラカス、「管楽器コース」ではストローのパンパイプなど、各コースとも身近なものを使って楽器を作成し、音の違いを楽しんだ。また、『リサイクル楽器を楽しもう』（汐文社）など、作成方法が掲載されている資料を紹介すると、子どもたちはその場で資料を手にとって読んだり、終了後「子どものへや」で資料を見ていた（口絵参照）。

○子どもの見学

1月から12月までに、54件1,189名の見学を実施した。内訳としては、保育園・幼稚園8件287名、小学校8件417名、中学校24件129名、養護学校2件24名、インターナショナルスクールや日本語学級2件73名、その他10件259名である。

全面開館から5年目となり、毎年見学のために来館している団体や1年間に複数回来館している団体があるなど、定着しつつあることがわかる。さらに今年は、公共図書館や地域文庫などの任意団体が、地域の子どもたちを募って見学の申請をするというケースが多く見受けられた。

内容は、館内見学（子ども向け当館紹介ビデオの視聴を含む）、おはなし会、調べ学習の援助などを希望により組み合わせ対応している。また、事前の申請がなく、学級・学年単位など大人数で訪れるケースもあったが、可能な範囲で対応をした（見学統計には計上していない）。<子どもの見学については本文32ページ以降も参照>

○学校図書館セット貸出し

学校図書館への支援を目的として、世界の国や地域に関する資料とその国の絵本や物語および原語の絵本などを、50冊前後のセットにして、学校図書館に1か月間貸し出すサービスである。申込みのあった学校図書館全てに希望セットの解題をまとめた小冊子を送付するほか、全セットの解題をホームページ上で公開している。

平成18年1月からは、新たに「アジアセット（中国・東南アジア諸国）」（小学校高学年向および中学校向）を加えて全部で5種類のセットとなり、平成18年1月から12月までにのべ186校に計9,503冊の資料を貸し出した。

平成18年は、平成19年1月からの貸出開始に向けて、新たに「世界を知るセット」（小学校高学年向）を構築した。それに伴い既存の「世界を知るセット」（小学校低学年向）を絵本および昔話中心のセットに再構築し内容を一新した。

4. その他

○第4回国際子ども図書館連絡会議

[平成18年6月21日(水)]

当館と協力関係にある諸機関に昨年度の活動状況を報告し、今後の計画および将来計画についての意見聴取等を行うため、連絡会議を開催した。平成18年の参加機

関は、大阪府立国際児童文学館、国際交流基金、国際子ども図書館を考える全国連絡会、国立青少年教育振興機構子どもゆめ基金部、国立教育政策研究所社会教育実践研究センター、全国学校図書館協議会、東京子ども図書館、読書推進運動協議会、日本国際児童図書評議会、日本児童図書出版協会、日本図書館協会、ブックスタート、文部科学省生涯学習政策局社会教育課、同省初等中等教育局児童生徒課、同省スポーツ・青少年局青少年課、ユネスコ・アジア文化センターの16機関であった。

○IFLA ソウル大会プロフェッショナルツアー

[平成18年8月27日(日)～28日(月)]

8月27日と28日の2日間、国立国会図書館と社団法人日本図書館協会が主催して、日本にあるさまざまな館種の児童図書館を見学する IFLA ソウル大会プロフェッショナルツアーを行った。対象者は IFLA ソウル大会に参加した IFLA 子ども・ヤングアダルト図書館分科会常任委員と読書分科会常任委員およびその関係者であった。27日は国立国会図書館国際子ども図書館、中野区にある財団法人東京子ども図書館、28日は小平市中央図書館、小平市内の家庭文庫であるあかしあ文庫を見学し、意見交換を行った。参加者は4名にとどまったが、日本の児童サービスの歴史と特色がよく理解でき、充実した内容、と好評であった。

○プランゲ文庫児童書の公開開始

国立国会図書館ではメリーランド大学との共同事業としてプランゲ文庫の雑誌、新聞を収集しており、図書事業として第一期に児童書約8,000冊を3年計画でカラーマイクロフィルム化して収集し、国際子ども図書館での順次利用提供を予定している。平成18年10月24日、300冊分のマイクロフィルムの提供を開始した。

5. 刊行物

- ・パンフレット：『国際子ども図書館』（日本語、英語）
- ・『国際子ども図書館の窓』第6号*
- ・展示会図録『北欧からのおくりもの—子どもの本のあゆみ』
- ・『平成17年度国際子ども図書館児童文学連続講座講義録「日本児童文学の流れ」』*
- ・利用案内：一般向け、子ども向け（各日本語版）
- ・建物案内パンフレット

*…国際子ども図書館ホームページ (<http://www.kodomo.go.jp/>) にて PDF ファイルを掲載しています。



数字で見る！

国際子ども図書館

(1) 国際子ども図書館所蔵統計（平成18年9月30日現在）

資料区分				18.9.30現在 所蔵数		
資料 情報 課	図書 (単位：冊)	日本語	児童書（*1）	191,735		
			児童書関連書、参考図書	13,604		
			小計	205,339		
		外国語	児童書（*1）	欧米言語	34,606	
				アジア言語	15,112	
			児童書関連参考書	2,201		
			小計	51,919		
	計	257,258				
	逐次刊行物 (単位：タイトル)	雑誌	日本語	児童雑誌	1,010	
				児童関連誌	744	
			外国語	児童雑誌	欧米言語	28
					アジア言語	30
				児童関連誌	欧米言語	77
		アジア言語	6			
		小計	1,895			
新聞	日本語	15				
	外国語	1				
非図書資料 (*2) (単位：枚数 または点数)	静止画、紙芝居（*3）		14,238 (1,083)			
	カード、カルタ（*3）		8,559 (148)			
	マイクロフィルム		128			
	マイクロフィッシュ		35,924			
	音楽資料（レコード、CD、カセットテープ）（*4）		1,102			
	映像資料（ビデオテープ、ビデオディスク）		2,667			
電子資料（光ディスク、磁気ディスク）		273				
児童サー ビス課	図書 (単位：冊)	日本語	13,958			
		外国語	789			
		小計	14,747			
	逐次刊行物（単位：タイトル）		22			
	非図書資料（単位：点）		264			

※平成18年より国立国会図書館の基本統計に基づいた集計方法に変更。
付随して、集計時期を9月30日現在に変更した。

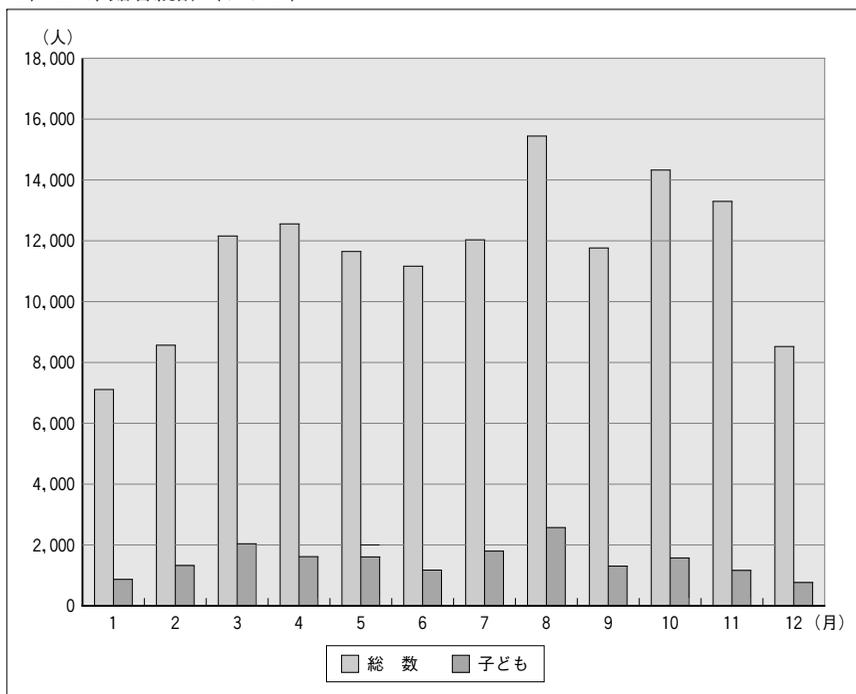
- *1 学校教科書、教師用指導書、学習参考書、楽譜、組み合わせ資料を含む
- *2 教師用指導書、児童書関連書のうち非図書形態のもの数を含む
- *3 括弧内はタイトル数
- *4 教師用指導書のみ（児童書音楽資料は未所蔵）

(2) 国際子ども図書館利用統計（平成18年1月5日～12月27日）

1)-a 来館者統計・平成12年5月6日～平成18年12月27日までの総入館数：779,713人

	合 計			曜 日 別 内 訳								
				火～金			土			日		
	日数	人 数		日数	人数	平均	日数	人数	平均	日数	人数	平均
総数		子ども										
1月	22	7,112	870	14	3,751	268	4	1,418	355	4	1,943	486
2月	22	8,567	1,328	15	4,837	322	3	1,810	603	4	1,920	480
3月	25	12,157	2,040	17	7,123	419	4	2,593	648	4	2,441	610
4月	24	12,554	1,615	15	5,499	367	4	3,398	850	5	3,657	731
5月	23	11,648	1,609	15	6,587	439	4	2,905	726	4	2,156	539
6月	25	11,167	1,175	17	6,163	363	4	2,666	667	4	2,338	585
7月	25	12,032	1,801	15	5,295	353	5	3,092	618	5	3,645	729
8月	26	15,444	2,572	18	9,933	552	4	2,595	649	4	2,916	729
9月	24	11,765	1,306	16	5,849	366	4	2,745	686	4	3,171	793
10月	25	14,325	1,575	16	6,812	426	4	3,322	831	5	4,191	838
11月	23	13,296	1,164	15	7,388	493	4	3,065	766	4	2,843	711
12月	21	8,524	767	14	4,535	324	3	1,721	574	4	2,268	567
合計	285	138,591	17,822	187	73,772	395	47	31,330	667	51	33,489	657

1)-b 来館者統計（グラフ）



2) 「資料室」利用統計

	利用状況			資料室別			
				第1資料室		第2資料室	
	開室日数	人数	平均	人数	平均	人数	平均
1月	18	814	45	560	31	254	14
2月	18	928	52	615	34	313	17
3月	21	1,016	48	665	32	351	17
4月	19	920	48	590	31	330	17
5月	19	1,285	68	827	44	458	24
6月	21	1,177	56	784	37	393	19
7月	20	1,118	56	707	35	411	21
8月	22	1,593	72	1,030	47	563	26
9月	20	1,125	56	721	36	404	20
10月	20	1,275	64	803	40	472	24
11月	19	1,310	69	851	45	459	24
12月	17	867	51	584	34	283	17
合計	234	13,428	57	8,737	37	4,691	20

3) 本のミュージアムの統計は「活動報告」を参照のこと。

4) 「子どものへや」利用統計

	利用状況						
	開館日数	人数	平均	大人		子ども	
				人数	平均	人数	平均
1月	22	3,237	147	2,386	108	851	39
2月	22	4,187	190	2,935	133	1,252	57
3月	25	6,038	242	4,290	172	1,748	70
4月	24	5,272	220	3,978	166	1,294	54
5月	23	5,523	240	4,200	183	1,323	58
6月	25	5,146	206	4,020	161	1,126	45
7月	25	6,390	256	4,640	186	1,750	70
8月	26	7,366	283	5,199	200	2,167	83
9月	24	5,040	210	3,949	165	1,091	45
10月	25	6,245	250	4,848	194	1,397	56
11月	23	5,498	239	4,459	194	1,039	45
12月	21	3,590	171	2,851	136	739	35
合計	285	63,532	223	47,755	168	15,777	55

5) 「メディアふれあいコーナー」利用統計

	利用状況		
	開室日数	人数	平均
1月	21	2,853	136
2月	22	3,769	171
3月	25	5,697	228
4月	24	5,728	239
5月	23	5,386	234
6月	25	5,235	209
7月	25	6,246	250
8月	26	8,256	318
9月	24	5,391	225
10月	24	6,653	277
11月	23	6,640	289
12月	21	4,413	210
合計	283	66,267	234

※2/4、4/22、7/15、8/18、9/30、
11/9は午後休室
※10/17は全日休室

6) 複写サービス利用統計

	来館複写		郵送複写		計	
	件	枚	件	枚	件	枚
1月	497	3,215	34	1,092	531	4,307
2月	557	3,485	16	244	573	3,729
3月	563	3,885	26	109	589	3,994
4月	359	1,887	39	506	398	2,393
5月	568	2,698	120	417	688	3,115
6月	503	3,015	86	514	589	3,529
7月	483	3,200	122	1,014	605	4,214
8月	825	5,395	78	245	903	5,640
9月	629	4,574	58	367	687	4,941
10月	492	3,188	82	229	574	3,417
11月	669	4,402	80	292	749	4,694
12月	612	4,129	68	556	680	4,685
合計	6,757	43,073	809	5,585	7,566	48,658

7) 資料出納統計

	出納 (第1+第2資料室)	
	件	冊
1月	902	2,009
2月	1,115	2,558
3月	1,150	3,829
4月	1,118	2,452
5月	1,238	2,829
6月	1,034	2,950
7月	971	1,958
8月	1,561	3,616
9月	1,294	2,587
10月	1,795	3,480
11月	1,713	4,115
12月	1,172	2,803
合計	15,063	35,186

8) レファレンス統計

	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	小計
		情報源・文献紹介	文書	7	11	3	10	10	16	9	6	5	13	
電話	3		4	1	1	3	4	2	2	2	1	3	3	29
口頭	15		5	5	7	8	17	7	8	5	3	16	4	100
簡易な事実調査	文書	3	9	8	7	4	11	4	15	5	0	13	8	87
	電話	3	6	3	3	4	4	2	3	2	4	6	2	42
	口頭	10	6	2	5	7	4	4	7	6	3	9	2	65
書誌的事項調査	文書	9	8	6	7	12	11	6	9	12	10	10	17	117
	電話	4	6	3	3	3	3	3	5	2	10	5	4	51
	口頭	1	6	4	4	7	1	4	6	2	5	4	3	47
所蔵調査	文書	3	1	1	0	4	4	5	6	2	2	0	2	30
	電話	14	24	24	13	15	24	20	24	22	14	18	20	232
	口頭	29	24	41	34	35	34	40	62	37	44	35	27	442
所蔵機関調査	文書	4	2	2	0	4	5	4	5	2	0	1	3	32
	電話	3	2	1	4	1	4	2	2	4	2	2	1	28
	口頭	8	4	6	1	9	2	6	10	18	8	6	7	85
類縁機関案内	文書	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2
	電話	3	3	0	0	1	3	2	2	3	2	3	7	29
	口頭	3	0	4	2	2	5	3	2	4	6	5	3	39
利用案内・その他 (*)	文書	1	2	2	1	4	2	1	1	2	2	1	10	29
	電話	18	29	29	19	19	16	35	30	31	32	31	31	320
	口頭	100	102	129	151	135	141	119	182	156	116	153	70	1,554
小計	文書	27	33	23	25	38	49	30	42	28	27	33	58	413
	電話	48	74	61	43	46	58	66	68	66	65	68	68	731
	口頭	166	147	191	204	203	204	183	277	228	185	228	116	2,332
総計		241	254	275	272	287	311	279	387	322	277	329	242	3,476

* 「利用案内・その他」の口頭には「機器操作支援」、「検索援助」を含む

9) 資料貸出統計

	国会・行政支部図	図書館間貸出	展示会貸出・その他	合計
	冊	冊	冊	
1月	1	52	7	60
2月	0	25	27	52
3月	0	33	12	45
4月	7	30	12	49
5月	12	36	4	52
6月	5	22	6	33
7月	9	20	26	55
8月	0	14	0	14
9月	2	16	0	18
10月	8	14	3	25
11月	5	14	6	25
12月	0	10	2	12
合計	49	286	105	440

10) 国際子ども図書館見学統計

	企画協力課		児童サービス課		合計	
	件数 (件)	人数 (人)	件数 (件)	人数 (人)	件数 (件)	人数 (人)
1月	13	122	3	118	16	240
2月	20	144	4	201	24	345
3月	24	141	8	206	32	347
4月	14	147	7	32	21	179
5月	13	77	7	96	20	173
6月	18	204	4	37	22	241
7月	19	180	5	133	24	313
8月	24	204	5	160	29	364
9月	16	163	3	64	19	227
10月	15	122	4	98	19	220
11月	15	208	1	19	16	227
12月	19	132	3	25	22	157
合計	210	1,844	54	1,189	264	3,033

11) ホームページ訪問者統計

	1日平均訪問者	1日ページ参照平均	月訪問者数	月ページ参照	再訪問者数
1月	1,897	6,729	58,825	208,620	4,706
2月	1,918	6,225	53,721	174,306	4,447
3月	2,056	6,309	63,739	195,589	4,712
4月	1,900	4,969	57,014	157,285	4,969
5月	2,580	9,507	77,423	285,235	7,143
6月	2,206	5,982	66,208	179,462	6,118
7月	2,328	6,967	72,168	215,982	5,901
8月	1,877	6,006	58,201	186,187	5,058
9月	1,299	3,631	38,976	108,947	3,535
10月	2,765	10,146	85,739	314,554	6,802
11月	2,328	6,610	69,841	198,318	5,530
12月	2,449	5,678	75,919	176,048	5,579
平均	2,134	6,563	64,815	200,044	5,375
合計			777,774	2,400,533	64,500

これから...

国際子ども図書館の今後の予定をご紹介します。

<2007年>

- 2月10日～9月9日
展示会「大空を見上げたらー太陽・月・星の本」
- 2月17日 講演会「神話から最新宇宙学まで」
- 3月11日 「子どものための絵本と音楽の会 エリック・カール『うたがみえるきこえるよ』」（東京のオペラの森実行委員会との共催）
- 3月24・25日
春休みおたのしみ会
- 4月22日 講演会「天文の魅力を探る」
（※「子ども読書の日」（4月23日）の行事を兼ねる）
- 5月5日 こどもの日おたのしみ会
- 7月22日 星座早見盤手作り講座（仮題）
- 7月28日・29日
夏休み子ども向け催物（科学あそび）
- 8月28日 講演会（「大空を見上げたら」展関連）
- 9月22日～2008年1月13日（予定）
展示会「ゆめいろのパレットⅢ（タイトル未定）」
- 10月（予定）
児童文学連続講座
- 12月22日 冬休みおたのしみ会

<2008年>

- 1月 学校図書館セット貸出し「ヨーロッパセット」（小学校低学年向、小学校高学年向）貸出し開始
- 1月26日～9月7日（予定）
展示会「チェコの児童書展（タイトル未定）」
- 3月1日 『国際子ども図書館の窓』第8号刊行
- 3月29日・30日
春休みおたのしみ会

また、年間を通してさまざまな行事を企画します。詳しくは当館ホームページ (<http://www.kodomo.go.jp/>) をご覧いただくか、下記へお問い合わせください。

国際子ども図書館 代表電話 03 (3827) 2053

利用案内

詳細は、当館ホームページ (<http://www.kodomo.go.jp/>) をご覧いただくか、
代表電話 03 (3827) 2053へお問い合わせください。

☆来館利用案内

- 利用できる人** どなたでも利用できます（ただし第一資料室・第二資料室の利用は18歳以上の方に限られます）。
- 所蔵資料** 国内で出版された児童図書、児童雑誌、外国語の児童書、児童書関連図書・雑誌等
- 資料の利用** 館内利用のみ。館外への帯出はできません。
- 資料請求** 9：30～16：30（於 第一資料室・第二資料室）
- 開館時間** 9：30～17：00
- 休館日** 月曜日、国民の祝日・休日（こどもの日を除く）。年末年始（12月28日～1月4日）、資料整理休館日（毎月第3水曜日）
- 休室日** 休館日のほか、以下の日が休室日となります。
2階 第一資料室・第二資料室：日曜日
3階 本のミュージアム：展示会準備等のための休室日

☆レファレンスサービス

児童書・児童文学、児童図書館活動等に関するお問い合わせについて、所蔵調査、所蔵機関調査、書誌的事項調査、簡易な事実調査、文献紹介等を行います。
申込み方法は、以下のとおりです。

- ◆直接来館 第一資料室・第二資料室にて受付
- ◆文書レファレンス 郵送または最寄りの図書館経由（ファクシミリ）にて受付
- ◆電話レファレンス 資料室開室時間中のみ

※電話では所蔵調査、利用案内、書誌的事項調査（目録記載程度）などについて件数を限って受け付けています。資料を直接確認しなければならないなどの時間を要する調査、および聞き間違いが生じやすい外国語文献についてのレファレンスは文書でお願いします。

☆複写サービス

著作権法の範囲内で、国際子ども図書館所蔵資料の複写（有料）を申し込むことができます。

◆来館による申込み

その日のうちに製品をお渡しする即日複写と、後日に製品を受け取る後日引渡し複写の二種類があります。

申込受付時間 開館日の10：00～16：00（後日引渡しは16：30まで）

製品引渡し時間 10：30～12：00、13：00～16：30

後日引渡しについては、郵送により製品を受け取ることもできます。この場合、料金は後払い（振込）となります。

即日複写は、紙の資料の電子式複写（普通のコピー）とマイクロ資料からの電子式引伸（普通紙への引伸ばし）があります。1回の申込みで申し込めるページ数には制限があります。大量の電子式複写、撮影によるマイクロフィルム作成等は後日引渡しとなります。

◆郵送による申込み

国際子ども図書館ホームページ掲載の「郵送複写申込書」を用いて、郵送による複写の申込みを受け付けています。製品は郵送となり、料金は後払い（振込）です。詳細は国際子ども図書館資料情報課情報サービス係までお問い合わせください。

☆資料の図書館間貸出し

国際子ども図書館には、所蔵資料をお近くの公共図書館・大学図書館に貸し出す「図書館間貸出制度」があります。図書館間貸出しは「図書館間貸出制度」に加入している図書館のみが対象となります。また、当館から借り受けた資料を借受館内で複写できるのは、複写利用についても申請して承認を受けた機関に限られます。お近くの図書館までお問い合わせください。

※雑誌や昭和25年以前刊行の図書など、貸し出しできない資料もあります。

☆見学・ツアー

<大人向け>「としょかんコース」（毎週火曜日）と「たてものコース」（毎週木曜日）を実施しています。いずれも14時開始です。参加ご希望の方は、開始10分前までに1階事務室でお申し込みください。また、このツアーとは別に、別途申し込みによる見学も行っています。詳しくは、企画協力課企画広報係までお問い合わせください。

<子ども向け>児童・生徒の見学については児童サービス課児童サービス係までお問い合わせください。

☆学校図書館セット貸出し

子どもの読書活動において重要な役割を担う学校図書館への支援を目的として、テーマごとに50冊前後で構成する資料のセットを貸し出します。

◆セットの種類

◎韓国 ◎北欧 ◎カナダ・アメリカ ◎アジア（中国・東南アジア諸国）
（各セットとも小学校高学年向と中学校向の2種類）

◎世界を知る（小学校低学年向と小学校高学年向の2種類）

※平成20年1月から「ヨーロッパ」（小学校低学年向と小学校高学年向の2種類）の貸出しを開始する予定です。

◆貸出期間：1か月間（郵送にかかる日数を含む）

◆費用：セットを当館に返却する際の送料

※その他、詳細については、当館ホームページ「学校図書館へのサービス」－「学校図書館セット貸出し」をご覧ください。なお、児童サービス課企画推進係までお問い合わせください。なお、ホームページでは、セットに含まれる資料の解題がご覧いただけます。

国際子ども図書館の窓 第7号 2007.3

発行所 国立国会図書館 **国際子ども図書館** 平成19年3月1日発行
編集責任者 村山 隆雄
〒110-0007 東京都台東区上野公園12-49
電 話 03 (3827) 2053 (代表) F A X 03 (3827) 2043
E-mail info@kodomo.go.jp ホームページ <http://www.kodomo.go.jp/>
印刷所 株式会社 山越

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分はそれぞれ筆者の個人的見解です。

本誌に掲載された記事を全文または長文にわたり抜粋して転載される場合には、事前に国際子ども図書館企画協力課協力係に連絡してください。



The Window

the journal of the International Library of Children's Literature

No. 007 March 2007

Contents

Frontispiece: Activities at the ILCL in FY2006	
Foreword	Takao Murayama 2
Exhibition "Struwwelpeter and other German children's books"	Exhibition team 3
Naughty children have come to Ueno! – The exhibition "Struwwelpeter and other German children's books" held by the ILCL	Takashi Yoshihara 6
Exhibition "Northern gifts – Children's books from the Nordic countries"	Exhibition team 11
Children's books from the Nordic countries – How rich the world is!	Nobuko Fukui 13
The 100th anniversary of the former Imperial Library building	Planning and Cooperation Division 17
British picture books in the 19 th century from the Winnington- Ingram Collection in the ILCL	Shin'ichi Yoshida 19
The situation of children's literature in Hungary today – Observation from Japan	Berta Fukaya 26
ILCL tours for children are available on semi-customized!	Children's Services Division 32
New additions to Picture Book Gallery – "Edo Picture Books and Japonisme" and "Children's Books: Transmission of Images"	Planning and Cooperation Division 35
Report on the FY2006 ILCL Lecture Series on Children's Literature – Utilizing the ILCL collections – Pleasure of picture books: learning from the tradition of British picture books	Planning and Cooperation Division 36
ILCL activity report	38
ILCL in figures	47
Schedule	52
User guide	53
